

二〇〇九年度関西学院大学先端社会研究所シンポジウム

戦争が生み出す社会 PART II

『見えない敵』への恐れと排除

～基調講演～

「世界はもっと豊かだし、
人はもっと優しい」

森 達也

映画監督／ドキュメンタリー作家

～コメント～

鈴木 謙介

関西学院大学

原口 剛

大阪市立大学
都市研究プラザ

～司会～

阿部 潔

関西学院大学

2009年10月17日(土)

13:00～16:00(開場:12:30)

関西学院大学上ヶ原キャンパス図書館ホール

2009 年度 先端社会研究所 シンポジウム

戦争が生み出す社会 Part II Societies Forges by War

日時 2009 年 10 月 17 日 (土) 13:00 ~ 16:00

場所 関西学院大学上ヶ原キャンパス図書館ホール

第一部『見えない敵』への恐れと排除

司会 (阿部): それでは、定刻の 1 時になりましたので始めたいと思います。今日は、皆さん土曜日、しかも天気の悪い中、お越しいただきありがとうございます。お手元のプログラムにありますように、本日の「戦争が生み出す社会 Part II」は、昨年度の末、今年の 3 月に開催した Part I の後編ということで『見えない敵』への恐れと排除」というサブタイトルの下に基調講演として森達也さんにお話をいただいた後、鈴木謙介さんと原口剛さんの方からコメントをいただき、その後パネルディスカッション並びにフロアを交えての討論をしていきたいと思ひます。

早速ですが、このシンポジウムを企画した当時、先端社会研究所所長であった荻野昌弘の方から、学会出席のため、この場には来られないということで、事前に撮ったビデオがありますので、失礼とは思ひますけれども、そのビデオを流すことで挨拶に代えさせていただきます。では、ビデオの方、よろしくお祈ひします。

(ビデオ上映)

荻野: 皆さん、こんにちは。関西学院大学先端社会研究所所長の荻野と申します。実は、所長と申しましても、所長だったのは 9 月 30 日までで、10 月 1 日からは、今日、司会をされます阿部さんが新たに所長としてこの研究所を引っ張っています。ただ、私が今日、このような形でお話するのは、先端社会研究所ができたのは昨年 4 月 1 日なんですけれども、それ以来、「戦争が生み出す社会」というテーマで共同研究をしてまいりまして、この責任者になったことが一つの決め手だと。

実は、この研究所は 1 年半ほど経っているわけですが、そもそもの発端は、それ以前 5 年間、文部科学省の 21 世紀 COE プログラムというプログラムで、「人類の幸福に資する社会調査の研究」というテーマで研究をしておりまして、それを継続・発展するためにこの研究所ができたんです。そのとき研究していたのは、一体、我々社会学者が社会

調査をするということはどういう意味があるのかということも含めて、社会調査について研究していたんですが、そのとき私は1冊の本に出会いました。それが、今日講演をしていただく森達也さんの『下山事件（シモヤマ・ケース）』（新潮社、2006年）という本です。この本の中で、森さんは下山事件が、どういう事件であったかということについて、様々な人々にインタビューしながら、その事件の真相を追っていくわけです。その中でインタビューをする人々、自分、つまり森さんとの関係が一体どういうものであるのかを常に自問自答されています。森さんは社会学者ではありませんけれども、社会学者よりはるかに鋭く、調査者とそれから調査の対象になる人たちとの関係についてこの本の中で分析しています。そういう意味で、この本が、我々の研究にとっても参考になると判断したんです。

下山事件というのは1949年に、当時の国鉄初代総裁だった下山定則氏が列車に轢かれて死ぬという事件があって、それが自殺だったのか、それとも他殺だったのかということについて、常に議論が巻き起こっています。森さんも、下山事件がどのような事件だったのかという点について詳しく調べられているわけですが、我々の観点からすると、この下山事件というのは、戦後の日本がどのような混乱期にあったのかということを象徴的に示す事件であるからではないかと思います。戦争のとき、つまり太平洋戦争ですけれども、そのときに一体何が起こったのか、兵士たちはどのような苦勞をしたのか、それから日本国内、いわゆるその不自由な社会でどのような生活をされていたのか、その当時のことについての研究が数多くあるんです。しかし、戦争がその後の日本の社会の形成にいかなる意味を持ったのかということに関しての研究は意外なほど少ないです。

先日、台湾の社会学者と少し話をする機会があったんですが、その社会学者は、「日本社会で太平洋戦争の影響は非常に大きいにもかかわらず、なぜ日本の社会学者はそれについて研究しないのか」ということを言っていました。おそらく戦争だけではなくて、戦争に敗れたことによって日本の社会は大きく変わっているわけですが、つまり戦争が日本社会のその後の変化に大きい影響を及ぼしているわけですし、それについて研究されている



とは言えない状況にあるわけです。

下山事件の中で興味深いのは、その事件の背後に米軍が絡んでいるとか、GHQが絡んでいるのではないかという、そういう憶測が常にされているわけですが、よくよく考えてみると、米軍がやってきたのは1944年8月以降なんです。それまで、米軍の存在とは全く無縁の中で日本人は生活しているんです。ところが、米軍という他者がやってきて、基地ができる。さまざまな形で地域の中に大きな影響を及ぼしていく、そういうことがあったわけですが、それに対して余り我々は関心を持たない。あるいはそれ以外に、敗戦後にそれまで海外にいた多くの軍属、例えば満州に開拓に行ったり、海外で生活していた人たちが、概算で600万人以上は日本におり立ったと言われています。一体その人たちはどこに住んだのか、その人たちがどのような生活をしたのか、そういうことについても研究が余りされていません。

私自身が一つ調べたところでは、千葉県の三里塚という地域なわけですね。今は成田空港ができていますけれども、そこは戦後海外からの引揚者が開拓した場所なんです。中には沖縄出身の人たちもいて、一体その人たちがどこから来たかという、実はペルーから来てる。ペルーとは戦時中に日本と敵対する関係にあるということで、日系のペルー移民は、一部は米国の収容所に送られたりしてきたわけで、それをペルーに移民した人たちが、特に沖縄出身者が多かったんですけれども、日本に戻ってきます。その後に彼らが何処に行ったかという、その一部が三里塚に行ってそこで農地開拓をしていた。しかし、それがまた空港が建設されることになって、そこで開拓をしていた人たちはそこから立ち去らざるを得ない、そうした状況に陥ったわけです。つまり、戦争は、単にその戦時中の問題だけではなくて、戦争が起こったことによって社会は大きく変わっていく。社会を変える大きなファクターの一つであると考えられます。それが、私たちが本研究所が取り組んできた「戦争が生み出す社会」というテーマに出会った大きな理由であります。

太平洋戦争がいかに影響したのかということだけではなくて、今、現代社会を振り返ってみて、単に日本だけではなくて、戦争という言葉が随分出てきます。6月に我々の研究所がある国際学会で、「戦争が生み出す社会」というテーマで一つのセッションを設けたんですが、そのときに報告したポルトガル人の社会学者は、イギリスを例に取って、特に9.11以降、イギリスでは「テロに対する戦争」という言葉を非常に使っていて、そのスローガンをもとに新たな法律がどんどんつくられる。それはもちろんテロリズムに対する戦争ですから、イギリス社会を管理するような法律がつけられているわけです。

今日のシンポジウムのテーマでは、「見えない敵」というキーワードが出てくると思いますが、その見えない敵に対する戦争、その戦争をするために一体どのような対策を講じるべきかということが、今、日本だけではなくて、世界中のあちこちで考えられている。

つまり、そこでも戦争のイメージが社会を作り変えていくということが言えるのではないのでしょうか、そう思います。そういう意味で、今日のシンポジウムは、非常にアクチュアルな、我々に重要なテーマであると思います。

本来であれば、私はこの場においてご挨拶申し上げるべきところなんですけれども、残念ながらこの映像が流れている時に、私は岡山におります。今日のシンポジウムが盛況であることを願って、ご挨拶を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

司会： 今のことに私からつけ加える言葉はほとんどございませぬけれども、今日のシンポジウムを始めるに当たって1点だけ皆さんにお伝えしておきたいことは、「見えない敵」ということがテーマになっていますが、この背景としては、戦争、広い意味での国と国との戦争だけではなくて、自己と他者とが戦い合う、または抗争するというのをテーマに、それを今現在我々はどんなところにどんな敵をイメージしているのか、いないのか。また、それは本当に実態としてあるものなのか、それとも想像の世界のことが一人歩きしているのか、そして今の萩野の方からの説明にもありましたように、今、どのような手段が講じられていて、それは本当に現実的に我々の不安を解消しているのか、もしくは不安を喚起しているのではないのか。そういうことを問題意識として今回のシンポジウムを企画いたしました。

それでは、森達也さんの方から基調講演をしていただきます。今日、皆様にお配りしたプログラムの中にも書いてありますように、森さんは『A』、『A2』と言うオウム真理教、これは大きな、その当時も今も私たちにとっての「他者」だと思いますけれども、そういうものに迫るドキュメンタリーを撮られたり、あとは様々に、今日の映像資料でも出てくるかと思えますけれども、死刑を初めとする罪に対する厳罰化が一体今どういう風に起こっているのか、そしてそれを進めている我々の社会はどのような方向に向かっているのかということについて、鋭い問題提起をされておられます。

今日は、講演タイトルとしては、これは著書のタイトルでもありますけれども、「世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい」ということで基調講演を1時間ほどお願いしたいと思います。それでは、森さん、よろしく申し上げます。

[基調講演]

「世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい」

森 達也

映画監督／ドキュメンタリー作家

森： こんにちは。風邪を引いちゃいまして、昨日などで声がほとんど出ない状況で、ちょっとこれ大丈夫かと思ったんですけど、何とか持ち直して1時間ぐらいは多分、シンポジウムも含めて持ちこたえられるぐらいの感じなんですけども。2日ぐらいは結構熱が出たので、もしかすると新型インフルじゃないだろうかと思ったんですけど、そうじゃないようです。

だからというわけじゃないのだけど、春に起きたあの騒動は何だったんだろうと思いませんか。とにかく感染したという噂が出ただけで強制隔離であったり、機内検疫であったり、夜中には榊添さんとか首相もテレビに出てましたね。戒厳令のような表情で。マスクをみんな買い込んで、一体あれは何だったんだろうと思います。今は死者も出ています。でも比較にならないくらい、社会とメディアは冷淡ですね。まあこの冷淡を冷静といいかえることもできるけれど、でもどちらにせよ両極端です。日本人ってこの傾向があるようです。中庸がなかなか実践できない。一極集中・付和雷同しやすい国民性ですね。

環境リスク学というジャンルがあります。環境における危険な因子の科学的測定を目的とするこのジャンルでは、危険性を二つの側面から考えます。リスクとハザードです。リスクは文字どおり危険性、そしてハザードは毒性と解釈してください。たとえばマムシ。ハザードは高い。かまれて放置したら死ぬ場合があります。でもリスクは低い。なぜなら都市部にはほとんど生息していませんから。つまりマムシについて都市部に暮らす多くの人は、少なくとも過剰に脅える必要はない。

ところが情報が錯綜すると、もしくは枯渇すると、このリスクとハザードの分類ができ



なくなる。ごっちゃになってしまう。怯えなくてもいいものに怯えて、怯えなきゃいけない時には怯えないという、そういった状況になってしまう。まさしくこの新型インフルエンザについても言えますね。当然ウイルスですから、これから変異する可能性はとても高い。毒性だってより強くなるかもしれない。最も警戒しなきゃいけない時期なのに、春にさんざん騒ぎ過ぎたせいなのかな、何となくもう騒ぎづらいというか、無感覚になってしまっている。

荻野先代所長がご指摘なされたように、この国は戦後、あの戦争を総括できていない。相対化も為されていない。そしてその自覚もないというような状況において、このリスクとハザードの錯綜は、もっと考えられるべきテーマであると思います。

第二次世界大戦、前戦の兵士の発砲率を調べた米軍は、5分の4の兵士が前戦では発砲していなかったとのデータが集計されて驚愕します。兵士たちのヒアリングをしても、ほとんど引き金を引けなかったという事実が明らかになりました。

人は人を簡単には殺せない。考えたら当たり前のことだけど、それは前線の兵士も決して例外化されていなかった。でも米軍としては、これでは世界最強の軍隊になれないということで、慌てているんな世界各國の軍隊のマニュアルなんかを取り寄せて研究して、訓練の形態を変えてきます。海兵隊の訓練が一番典型ですね。キューブリックの映画『フルメタル・ジャケット』は、海兵隊の初年兵教育が重要なポイントです。とにかく徹底して壊す。ためらいとか逡巡とか、そんな気持ちを削ぎ落とす。その帰結として少年たちは壊れた機械になる。その過程が描かれています。壊すだけでなく米軍は、たとえば射撃訓練の際、それまでは円い標的だったのだけど、ここに人間の顔写真を貼るとか、そういった創意工夫で人を殺すことの抵抗感を薄くします。かつての日本の帝国陸軍は中国で、捕まえた捕虜を立木に縛りつけて初年兵に銃剣で突き刺させる訓練をやっていました。実際にやった人の話を聞いたことがあります。最初はまったく刺せないそうです。切っ先が捕虜の身体に触れた瞬間に指から力が抜けるそうです。でも上官がそこで腕をつかんで無理矢理に刺させる。一回やってしまうと、それ以降は当たり前のようになってしまう。やっぱり壊れるんです、人間らしさが。

米軍のこの訓練は、ベトナム戦争で戦禍を発揮します。ところが問題が発生した。壊れた兵士が復帰して帰ってきて社会問題を引き起こす。精神状態はきわめて不安定。自ら犯罪者になるという事例が相次いだ。『ディアハンター』とか『帰郷』、『タクシードライバー』や『ランボー1』などが、壊れた兵士をテーマにしています。当時のアメリカにとって、きわめて大きな社会問題でした。

そこで米軍が次に考えたのは、殺す実感のない兵器の開発です。つまりデジタル兵器。それが一番花開いたのが湾岸戦争ですね。デジタルな映像を見ながらクリックして人を殺

す。ラスベガスにあるクリーチ基地では、パイロットが250人いるのに戦闘機などは一機もない。なぜなら彼らはみな移動式コンテナの中に入って、GPS機能を駆使しながら、遠く離れた戦地の上空を飛翔するプレデターやリーバーなどの無人飛行機を操るからです。感覚としてはまさしく街のアーケードゲーム。反撃されるという不安も生じない。画面に映るデジタルな標的を攻撃するだけです。

結果として湾岸戦争は、メディアからは不評でした。取材がしづらいからです。ということは軍にとってもプロパガンダがやりづらい。こうして米軍は、また少し軌道を修正します。

イラク戦争は空爆から始まりました。その意味では湾岸戦争の延長です。でも米軍はメディアに組み込み従軍取材をさせます。つまりエンベット。組み込まれることでメディアは、軍と一体化してしまふ。こうして圧力を加えることなくプロパガンダが遂行される。やがて地上戦が始まります。つまりバグダット制圧。想像だけど、米軍はかつての日本占領をイメージしたんじゃないかな。とても従順な国民でした。昨日までは鬼畜米英と言っていた国民が、敗戦と同時にギブミーチョコレートです。神様、仏様、マッカーサー様。テロどころかほとんど抵抗がない。大成功の占領でした。恐らくはその記憶があったんだと思う。イラクも簡単に制圧できると。ところが侵攻したら全然違ふ。とても激しい抵抗にあった。つまりまた地上戦になっちゃった。その結果、また兵士が壊れ始めます。アブグレイブの刑務所での虐待とか、あるいは米兵たちが、イラク市民、一般市民をレイプしたとかね。いろんな不祥事、事件が相次ぎ、同時に帰還した兵士たちがまた問題を起こして、社会問題になって、..最近も発砲事件がありましたね。やっぱり壊れちゃうんですね、戦争という状況で人間は。これは治せない。

さっきも言いましたが、日本軍もかつて中国で、やはり皇軍の兵士としてたくさんの中国民衆を殺してきました。でも、意外と日本人は壊れないんですよ。ドキュメンタリーならば『リーベンクイズ（日本鬼子）』とか、最近では『蟻の兵隊』とか、かつての皇軍兵士の過去を振り返るという映画は結構あるんです。ただ、淡々としていますね。あるいは、中帰連という中国から帰還した兵士たちの、自分たちの加虐行為を報告しあい、確かめ合うことを趣旨にした会がありますけれど、やっぱり壊れてはいいんです、少なくとも。もちろん個人差はある。関西学院大学の野田正彰さんも指摘されているけれど、どこかにしまいでんしているんですね、奥さんにすら話さない。あるいは本当に忘れてしまっている。だから苦しんでいない。トラウマが残らない。文化の差異というか、宗教観も関係しているかもしれないけれど、日本人の特性を考える上では極めて重要な要素だと思います。

その日本人の特性を考えるうえで、まずは厳罰化から話を始めます。ペナル・ポピュリズム (Penal Populism) ですね。今は世界的な傾向です。特に代表的な国が米国、イギリス、

あと意外なところでニュージーランド、そして日本です。この4つの国には共通項もあるのだけど、日本だけが例外である点も幾つかあります。1つは、二大政党制です。アメリカ、イギリス、ニュージーランド、いずれも代表的な二大政党制です。二大政党制の重要な欠陥は、ポピュリズムに走りやすいわけです。ペナル・ポピュリズムという言葉が示すように、厳罰化というのは国民の欲望や衝動でもあるんです。「悪いやつを早く罰してくれ」、「悪いやつを閉じ込めてくれ」、「悪いやつを排除してくれ、消してくれ」と。一旦、不安と恐怖が高まってきて、こういった願望はとでも強くなる。二大政党制の場合は、各政党競争でいかにこの世論を味方につけるかの競争ですから、こちらにどんどんベクトルを向けてしまうんですね。その結果、厳罰化が進んでしまう。日本はこれまで二大政党制ではなかったけれど、そもそもポピュリズムが強い国です。政治もメディアも司法も、民意に抗うということをあまりしない。つまり世論がチャンピオンですね、この国では、民意が。でも、もしかしたら、これから二大政党制が始まるかもしれない。であれば、より一層ポピュリズムはこれから激化するわけで、ちょっと怖いですね、どんな風になるのか。

あともう一つ、やはり日本だけが他の3つの国と共通していない項目があるんです。米国、イギリス、ニュージーランドいずれも治安は確かに良くはない。ところが、日本は圧倒的に治安はいい。昔も今も、世界のトップクラスです。でも厳罰化だけは一緒なんです。なぜなら体感治安、つまり治安が悪いと多くの人が感覚的に思い込んでいる。9割以上はメディアの責任だと思いますが、メディアが悪いということは僕らが悪いということです。僕らが望むからメディアはその方向に行くわけです。僕らが望まなきゃそちらに行かないという、そういった相互作用ですよ。この相互作用で戦争も生まれます。

まず、その厳罰化から話を始めたいんですが、世界的な厳罰化の傾向の中で、これに抗っている地域があります。北欧です。フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、アイスランド。特にノルウェーは、ニルス・クリスティという犯罪学者が提唱する緩和政策、寛容化政策をベースにどんどん取り込む形で、圧倒的な治安の良さを獲得しています。

この8月に僕はノルウェーに行きました、NHKの番組の取材です。厳罰化をテーマにいろいろ取材してきました。その一部を上映します。

(ビデオ上映) ¹⁾

森： 1時間見てもらえれば僕は楽ですけど。それでは講師料をもらえなくなっちゃうんで、しゃべります (会場笑)。

1) 「未来への提言 犯罪学者 ニルス・クリスティ ～囚人にやさしい国からの報告～」(NHK BShi, 2009年10月1日放送) より。

今、米国は、国内の囚人が200万人を超えています。この40年で6倍に増えました。カリフォルニアやワシントンなど幾つかの州で今採用してるのが、通称スリーストライク法です。文字どおりストライク3つでアウト。つまり起訴が3つ重なったら、その段階で無期懲役、もしくは死刑という問答無用の法律です。娘さんを暴漢に殺された被害者遺族の運動がきっかけになって、この法律は成立しました。その結果、成人男子100人のうち1人が囚人という国になってしまった。黒人やヒスパニックであれば、この割合はもっと高くなります。親戚のうち2、3人は刑務所に入っている状態が当たり前という、そういった状況だと思います。過剰収容ですから、刑務所の中での矯正・更生はおろそかになる、もう押し込めてるだけですだからね。しょっちゅう暴動が起きています。つまり、より一層治安が悪化する。治安が悪化するから人々はさらなる厳罰化を求める。また、それに対して行政が応えて、もう悪循環に完全にはまってしまっている。

いま観てもらったのは、オスロ刑務所の現状です。比較的軽微な犯罪の人たちがここに収容されています。より重い罪を犯した人たちが行く刑務所があるので、そこを見てもらいます。ちなみに、ノルウェーの場合は、死刑はもちろんありません。無期も終身刑もない。最高刑21年です。



(ビデオ上映)

森： この番組の中のインタビューでクリスティが言ったようなことを、今のこの日本で主張すれば、おそらくかなりの批判に合うでしょうね。でも現実に、こういった国があるわけですね。現実に良好な治安を獲得している。

今、ノルウェーで年間殺人事件は何件か当然わかるはずないですね、データがないんだから。正解は1件前後です、国全体ですよ。年間1件前後。ただこれは故殺です。傷害致死は含まれていません、傷害致死を入れたら20件から30件と聞きました。それにしても驚異的な治安の良さですね。ただ、分母は違いますよ。500万弱ですからね、人口は日

本のほぼ20数分の1かなと考えたら、実は余り日本と変わらないんです。つまり日本もとても治安が良いんですよ、昔からね。でも、治安が悪いとみんなが思い込んでしまっている。

何故、そうってしまったかというところから話を続けます。僕の場合でいくと、やっぱりオウムですね。アメリカの厳罰化も9.11以降、とても拍車がかかりました。同じ意味合いで、日本でも厳罰化はオウム以降です。この15年間、つまりオウム以降、刑務所の収容者はほぼ2倍になりました。死刑判決執行もとても増えました。

何故、こういうことが起きてしまったか。僕の映画の『A』と『A2』、これが何故、テレビで放送されなかったかという、それを考えればわかりやすいと思います。ロケ2日終わった段階で、僕は制作中止を命じられて、土日を使って1人で撮っていたら、今度は僕自身が首になったと。テレビ業界から排除されました。その時はその理由を、あまり深く考えなかった。でも今なら分かります。何故なら、見た方の感想聞いてますから、いっぱい。普通ならここで、「会場で『A』か『A2』見た方何人いらっしゃいますか、手を挙げてください」と言うところなんですが。大体そう言うと、聞かなきゃよかったなという結果になるので、観客の方も聞くなという感じになっちゃうんでね(会場苦笑)。テンションが下がるので聞きません。数人いるんじゃないかという前提で話をしますけれど。

見た方の感想の殆どに共通するのが、「オウムの信者があれほどに普通だったとは思いませんでした」といった感想です。普通という定義は本来難しいですけど。ただ、間違いなく言えることは、森達也より彼らははるかに善良です。純粹です。優しいです。善良で純粹で優しい彼らが、あの凶悪な事件を起こした。でもこれは、当時のマスメディア的にはタブーでした、NGです。あの頃のメディアがオウムを語るときに使ったレトリックは二つしかないです。一つは、彼らは凶暴凶悪な殺人集団であるという前提、そしてもう一つは、麻原に洗脳されて自分の感情を失ったロボットのような不気味な集団である、このどちらかです。この2つが共通していることは、彼らは自分たちとは違う存在なんだということです。それを強く担保する。言い換えれば、視聴者、もしくは読者は、それを望むわけです。あれほどに凶悪な事件を起こした彼らが自分たちと同じであるはずがない、自分たちとは違う存在なんだと思いたい、願望です。メディアはこれに抗いません。さきほど言及したポピュリズムです。従います、従属します、寧ろ煽ります。如何に彼らが凶暴か、如何に彼らが変な集団かというのを。その結果、異物化、他者化ですね、これが激しく進んだ。

その結果、テレビを間に置いて善悪の二分化です。つまり悪のパーセンテージが激しく上がるということは、言い換えれば、こちら側、善のパーセンテージが上がるわけですね。善悪の二分化が激しく促進する。もう一つは、動機の不確かさですね。実は、いまだに彼

らが何故地下鉄でサリンを撒いたのか、その理由を僕は獲得できていません。裁判では、一応間近に迫った強制捜査の目を暗ますためにサリンを撒いたということになってますけれど、これは言い換えたなら、万引きが見つかりそうになったから店員さんを刺し殺しました、に近いですね。極めてバランスが変です。何となく納得できない、動機がよく分からない。

動機が分からないって怖い。皆さんが、もし最寄りの駅からうちに帰る、暗い夜道を歩いて帰るとします。そのある晩、背中を刺されました。幸い傷は軽傷で済んで、病院で手当を受けてるときに警察から電話が掛かってきて、「犯人捕まりました。ただ、捕まえたけど何が動機わかりませんね」と言われて納得出来ますか。納得出来るはずがないですね。何故、自分が刺されたのか、自分に何か落ち度があったのか、あるいは犯人が誰かと勘違いしたのか。犯人が自分を刺した理由が分からないことには安心できません。つまり、夜道をもう歩けない。

でも、結果的にオウムが、この不安や恐怖を、よりスケールアップした形で、この日本社会に刻印します。他者が怖くなっちゃたんです、いつ何時自分が刺されるかわからない。更に言えば、地下鉄サリン事件は不特定多数を狙った犯罪、テロですよ。ということは、1995年3月2日東京営団地下鉄に朝乗っていたら、もしかしたら自分が被害者になったかもしれない。そんな危機意識を持ってしまった。事件の多くは、怨恨や金銭がらみ、あるいは痴情とか、とにかく狙われる誰かがいた。ところが、オウムの場合、対象は不特定多数です、自分も被害者になるかもしれない。被害者感情、これが一気に、またメディアのもうものすごい報道によって、それこそもう新型インフルのように感染します、日本中。このへんが全部繋がって、激しい善悪二分化、更には被害者感情の共有化が起きました。事件直後、世相をリードしたメディアの第一人者、江川紹子さんと小林よしのりさん、2人とも共通項は、オウムの被害者でもあることです。オウムに狙われたわけです、彼らは。そういう被害者の思いが、ジャーナリスティックな偽装をまといながら識者の発言という形で、日本中に感染しました。それは一気に共振した、国中が。その結果、この国は激しく変わります。

その変化が一番顕著に形になったのは、1999年です。小渕内閣、この時は、国会で、まずは国旗国歌法案、通信傍受法案、住民基本台帳法案改正、これらが一気に決まりました。夜道が怖いからです。つまり、夜道をもう歩きたくないんです。でも、歩かないことには家に帰れない。じゃあ、皆さんどうします、どうやって家に帰りますか。まず、武器を持ちたくなるんですね。つまり護身用です。でも、武器を持つということは、自分も戦う決意をするわけです。やっぱり怖いです、できない、自分は持ちたくない、強い人に武器を持ってほしい。次に考えることは、1人が怖いわけです。であれば、「皆で帰ろう」と、「皆

で集まろう」と。つまり、夜8時か9時に駅前に集まって「こっちの方向へ帰る人はみんな帰らなう」と、要するに集団下校です。その発想になります。毎日集団下校してれば、最初は知らない同士もだんだん顔なじみになって、「来週、日曜日天気よかったらバーベキューしましょうか」とか、「折角だからTシャツみんなで作らうか」とか、「じゃあ、旗かなんか欲しいです」、「じゃあ、おれギター弾けるから、チームの歌かなんか作らうか」、これが99年の国会です。要するに纏まりたいんです。集団化したい、人々が怖いわけです。連帯したい。結束したい。そういった意識が激しく刺激されます。その証が欲しい。そういえば国旗と国歌が法制化されていなかったから、国旗と国家ちゃんとしようねと。

1999年にはもう1つありました。これ、自民党が作りました。憲法改正調査会、これはこの年です。つまり、この年から憲法をも変えようと。標的は9条の2項、武器を持たないとの誓い。まあ実質的には持っていますが、もっと公明正大に持ちたい、あるいは使いたい、ちゃんと軍備化したいと。つまり強くなってほしいと、自分は怖いからです。「怖いから武器を持ちたい」と、「自分は持てないけど国には持ってほしい」、「みんなで連帯しよう、纏まろう」と。この意識がとて強くなる。それがもう1995年以降脈々と続きますね。

今はもう多分この辺もそう変わらないと思いますけど、町を歩けば至るところにテロ警戒中であつたり、特別警戒実施中であつたり、JRに乗れば、不審物見かけましたらどうのとアナウンスがずっと流れ続けていて。壁じゅう至るところに監視カメラがあるとか、僕も昨日は職務質問受けて、東京からこっち来るときにね。職務質問はしょっちゅうなんですけど。そういった状況になってしまって、セキュリティ化ですね。でも、じゃあ、こういった状況で人は安心できるか。町中にお巡りさんがいっぱいいる、監視カメラがちょっとあちらこちらにある、テロ警戒中とそういったものが張ってある、安心だと思えますか。逆ですね、より一層怖くなる、より一層刺激されます。この悪循環に日本も陥っている。

ノルウェーで殺人事件は年間1件と言いました。じゃあ日本はどうかと。日本は、2007年度、数字1,199件です、2年前ですけど。数字だけ言われてもピンとこないですよ。データというのは比較しなきゃ意味がないです。この1,199件という数字はどのような意味があるか、戦後最低です。言い換えたら、2007年度は、日本は戦後最も殺人事件が少ない年でした。折れ線グラフに書いたら、こんな感じですね。一時上がって、急激に下がって、ずっとあと横ばい、これが日本の殺人事件。殺人事件だけじゃないです。ほかの粗暴犯、凶暴犯、もうほぼ同じカーブの描き方です。ちなみに、一番高かったのは1954年の3,081件です。人口はかなり増えてますから、ほぼ4分の1です、殺人事件に関して。言い換え

たら、4倍安全になってるんです。多分この中でもそれを知ってる方は何人もいらっしゃると思う。でも、多分その知ったニュースソースは、本であったり、ネットでしょう、恐らく。テレビではまずやらない、マスメディアはまずこれ報道しませんね。何かのついでにはやるかもしれませんが、2007年度にこれを警察庁がこの数値をリリースした段階でも全然どこもニュースにしなかった。同じ年にニューヨークも戦後最低の殺人事件の件数という発表があったんです。ニューヨークの場合はニュースになりました。でも、肝心の日本の場合はニュースにならない。

理由は、推測ですが、警察官ふえてますからね。問題は退職後です、彼らの。退職後どこに決まるのか。今セキュリティ業界がもうすごい上昇率ですからね、この不況下で。警備会社であったりとか、あと監視カメラ1個とっても、いろんな法人、団体、あとメーカーくっついてますよね。これ全部天下り先なんです、警察官の。つまり警官にとってみれば、余り治安がよくなったとみんなが思ってくれない方がいいと。もちろん警察官でも一生懸命やってる人もいますよ。でも、組織としてはそう考えてる可能性もありますね。

政治家はもう基本的に勉強不足です。3年前に鈴木宗男衆議院議員と『週刊プレイボーイ』で対談したんですけど、この話をしたら、彼は目をむいて否定するんです。あり得ない、絶対に事件は増えてるって。だから、警察白書のデータをその場で見せたら、絶句してました、信じられないって。最近の鈴木さんは、とても信頼できる政治家だと思ってるけど、その彼にして知らなかった。さらに自民党の主流派の政治家にとってみれば、寧ろ、皆が不安や恐怖を持ってくれたほうが纏まりますから、すごく統治しやすい、管理しやすい。そういった思惑が、もしかしたらあったのかもしれない。

あとはメディアです、何と言っても。メディアが報道していない。ところが、何故これを報道しないか。視聴率が下がるからですね、部数が落ちるから。つまり、一旦こういう状況になってしまうと、人は「危ないぞ」「怖いぞ」という声の方に目を向けます、耳を向けます。その結果、メディアは別にこの国を保守化しようとか、右傾化しようとか、戦争をもう一回起こそうとか考えてるわけではない。わけではないけれど、自然に売上を追う過程の中で危機を煽ってしまう。あるいはコメンテーター、特にイケイケの人を使うわけですね。その結果、煽られた国民、世論、民意はより一層危機意識を強く持ち、それによってより一層の「危ない」、「怖い」という声を求めている。これも悪循環、負のスパイラルに入ってしまう。そういった状況がもうずっと続いています。

不安や恐怖に襲われたとき、人はどうするか、何が怖いのか。お化粧屋敷がいい例なんですけど、お化粧屋敷なぜ怖いのか。お化粧屋敷で怖いのはお化粧じゃない、通路が怖いんです。薄暗い通路が怖い。つまり、いつどこかで何が出てくるか分からないから怖いんです。そこの角を曲がったら、関西学院の大学生がアルバイトでお化粧のメイクをしてい

るとか、その先にはマネキンの首が転がってるとか、分かっていたら怖くないですね。ただ、それが分からないから怖い。つまり人は分からないと怖いんです、見えないと怖い。夜の森怖いですよ、とても歩けない。夜の海もそうですね、まず泳げないです。だから人が怖いときにどうするか、分かろうとします、見ようとしています。つまり敵を探そうとします、不安状態が強ければ強いほど。でも、敵は何処にいるのか。

とても治安が悪いとみなが思い込んでしまっている、何処かに敵はいるはずだ、と。その結果どうするか。作っちゃうんです、敵を。いわゆる仮想敵です。この意識が外部に向いた時は、仮想敵国家です。僕が子どものころは旧ソ連、中国でした。今は時に北朝鮮です。そしてこの危機意識が内部に向いたときは、標的は犯罪者です、基本的には。彼らが敵なんです。

ちなみについ最近では、例えば北朝鮮のミサイル実験、相当大騒ぎになりましたね。当時の首相、麻生太郎は、また敵基地攻撃論を唱えましたね。因みに、あの実験をミサイルと言ってるのは日本だけです。国連は、議長声明で北朝鮮に勧告を出しました。ただ、でもそのときの原文は“Recent Rocket Launch”です、「最近のロケット発射」。何処にもミサイルという文字は無い。でも、外務省はこれを翻訳するときにロケットをミサイルに変えました。韓国も報道は、ロケットですよ、あの実験について。日本だけがミサイルって言ってるんですね。そもそも、ロケットでもミサイルでも区別難しいんですけどね。微妙です。でも受け取り方はまったく違う。

ただ、この背景には、特定の政治家であつたりとか、特定の政治指向とか、メディアの意図とか、あまりそう考えないほうがいい。むしろ民意です。無自覚な意識の集合体。敵が欲しいんです、敵を探してるんです、敵を求めちゃうんです。そこに北朝鮮という格好の存在がいるわけですね。こうやって仮想敵を設定します。外には北朝鮮、内には犯罪者。じゃあ、それで安心できるかと。敵がやっと見えた。違いますね。やっと敵を見つけた。



つまり邪悪で危険な存在ですから、今度はこの敵にいつ何時やられるかわからない。じゃあ、やられる前にやるしかない。これは立派な大義です。正義でもありますね。愛する者を守るため、同胞を守るため、自由主義を守るため、国土を守るため、つまり自衛です。手を出します。敵基地攻撃論ですね。戦争はこうやって起きます。

多分、19世紀末ぐらいまで、20世紀初頭ぐらいまでかな、植民地主義がまだありましたからね。他国の資源、領土、労働力を奪うことを目的にした戦争が多かった。でも、20世紀以降の近代戦争は、ほとんどが自衛戦争だと僕は思っています。近いところでは、例の田母神元海上自衛隊幕僚長が書いた論文、「あの戦争は侵略だったのか」。読んだ方いますか。知ってますよね。ネットでも読めますよ。

内容はタイトルが示すように、「あの戦争は侵略ではない、何故なら自衛の戦争だったからだ」という、そういった論旨です。であれば、これに対する反論は、一言ですみます、今言いました。すべての戦争は自衛です、自衛から始まります。日本は自衛隊という名称ですね。これは特別なことなのかどうか。ナチス・ドイツの軍隊は国防軍でした。あるいは今のイスラエル、あれも国防軍です。米国のペンタゴンは国防総省です。金正日の肩書は、幾つかありますが、そのうちの 하나가国防委員会委員長ですね。ミャンマー、ビルマの軍事政権の最高指導者タン・シュエ、彼の肩書は国家平和評議会議長だったかな。みんな「国防」、「自衛」、「平和」なんです。「侵略」の冠を持つ軍隊や指導者なんて世界中、何処にもない、みんな自衛のために存在します。自衛のための軍隊が自衛のために侵略します。人を殺します。かつての日本もそうでした。ハルノートがあってABCD包囲網があって、このままじゃ日本民族は滅ぶ、そう思い込んでしまった。その前に戦うより他ない。そこにアジアの解放という大義名分がくつつく。正義になっちゃうんですね。つまり、良かれという意識です。悪意じゃないんです。戦争は全部そうです。

ナチス・ドイツもそうですよ。彼らはゲルマン民族はこのままでは「滅ぶ」と思ったわけです。ベトナム戦争のときの米国もそうです。ドミノ理論ですね。共産主義は隣国に限りなく感染すると。であれば、守るために戦わねばならないと。その結果、大勢の人を殺し、自国民も殺し、あと日本の場合は酷かったですね。焼け跡に茫然と立ち尽くして、何故こんなことになったのかと。つまり戦争は常に、自衛でもあり、侵略でもあるわけです。どちらも戦争のメカニズムです。視点を変えるとどちらでもあるんです。その視点をなかなか持てない。いまだに自衛か侵略かという、とても浅いレベルで議論をしている。戦争の本質が分かってない。だからこそ、敵基地攻撃なんてこといまだに平気で言える。自衛の意識が戦争を起こし、人を殺す。

国内における厳罰化も同じです。死刑も同じです、死刑制度も同じです。根底にあるものは何か。見えない敵ですね、今日の演題に沿って言えば。善意です。優しさです。良か

れと思う気持ちです。オウムもそうなんです、彼らも良かれと思ってやったんです。オウムの場合は、ちょっと今日はもうそこまで話す時間がないけれども、あと宗教という、つまり生と死を転換する装置ですね。この部分も極めて典型的に働きました。そういったことがいろいろ重なってオウムの場合はあれほどの事件を起こしましたけれども、根底にあったのはオウムの場合も善意です。だからこそ、人は優しいままで、純粋なままで人を殺します。

僕は、仕事柄、多分、世間一般では悪いと言われている人にいっぱい会っています。テロリストにも会いました。中東に行ったときもアルカイダにも会っています。前の前の法務大臣は、「自分にはアルカイダの友人の友人がいる」と言っていましたけど(会場笑)、僕は実際に会ってきました。あるいは、北朝鮮の職員と会ったり、もちろんオウム幹部であったり、凶悪犯であったり。当たり前のこと言いますが、みんな一緒です。もちろん気が短い人とか、他人の痛みに鈍感な人、それはいますよ。でも、普通に話せば、普通に返事は返ってくる。子供の話になったら、会いたって泣くし、親の話になったら心配と言って泣くし、エッチな話をすれば喜ぶし。

色んな民族が世界中にいます、いろんな皮膚の色、肌の色がある。でも体温って全部一緒なんです。36.5度、平熱。これはどんな民族でも同じです。つまり人間というのは、内面器官は殆ど変わらない、全く変わらない。外側が違うだけです。文化とか環境で変わります。でも、人は人を敵だと思っちゃうんですね。人は群れる動物だからです。人は昔、樹上生活から地上においてきて二足歩行を始めたときに、群れることを選択した、単独生活ではなく。何故なら弱い動物だからです。天敵がいるから群れます。でも、その後人類は火を発見し、道具をつくり、火薬をつくり、武器を発明し、気づいたら地球上で最強になっていました、もう敵はいないんです。今どきライオンが怖いとか、オオカミが怖いなんて人はまずいない。でも危機意識は残っています、天敵への怯え。でも今はいない。ならばどうするか。探すんです、天敵を。で、見つけました、最も危険な生きもの。同族です、つまり人類です。人類にとっての敵は人類なんです、それが天敵なんです。ただ、その場合はちょっと皮膚の色が違うとか、違う神様を敬っているとか、違う共同体に帰属する集団です。ただしそのままでは、交易もできない、交流もできない。だから、痩せ我慢して近づいてって、ボディ・ランゲージでしゃべれば何となくコミュニケーションができた、もしくはコミュニケーションしてる最中に、近くで子供が遊んでる。お母さんが子供におっぱいをやっている。そういったのを見ながら、「何だ同じじゃないか」と。こうして交流が生まれ交易がされ文明が発祥し、ここまで来ました。

ところが、国内的にはオウム、国際的には9.11で一気に戻っちゃった、かつての恐怖の時代に。もちろん、こういった事件は、殺戮は、これまでの歴史でいくらでもありまし

た。じゃあ、何故こんなに強い影響力を、サリン事件と同時多発テロは持ったのか。メディアです。9.11の映像は世界中の人が見た。被害者意識を皆が共有してしまった。被害者が100人いたら加害者も100人いるはずなんです。でも、加害者の意識は持たない。メディアもほとんど報道しませんからね。それが最近、ここで光市母子殺害事件なんかもそうです。被害者の側からの視点しか報道しない。だから皆が被害者化意識を共有してしまう。その結果、当然自分は善なる被害者ですからね、もう加害者が憎い。表層的な応報感情だけを共有する。その結果、厳罰化も進む。仮装敵という国もより一層鮮明になる。あとは戦うしかない、やっつけるしかないんだ、それは自衛なんです。自分にとっては正当防衛です。でも、端から見れば、これは侵略でもあるし、過剰防衛でもあるわけです。こうやって、人類は人を殺し続けてきました。

悪意はせいぜい数人を殺すことが限界です。これ僕の実感。僕の実感って、僕が殺したわけでもないけどね（会場笑）。色々会ってきましたから。人は自分の利益とか欲望で人を殺す場合は、せいぜい数人が限界、そんなに強くない、人は。でも、悪意じゃなく善意、正義、大義、セキュリティが燃料になったとき、人は人を際限なく殺します。何千人、何万人殺せます。摩擦が働かないからです、後ろめたさがないからです。こうやって戦争が起きる、虐殺が起きる。

とても今日は早口に、多分普段の数十倍のスピードでしゃべっちゃいましたけれど。こういう構造で戦争が起き、厳罰化が進む、ほとんどこれが表裏ですね。その根底にあるのは優しさです。だから、きょうの僕の演題、「世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい」、このフレーズはよく批判されます。森は性善説だって言われます。二分法がまずは違うと思う。善でもあれば悪でもある。それが人間です。ただし僕は、人は悪なる領域より善なる領域のほうが大きいと思っています。つまり優しい。でも、その優しさが人を殺します、人を害します。であれば、僕らが考えるべきは、外なる悪意ではなくて、内なる善意です。自分の中での善意。

特に大規模な戦争であつたり虐殺であつたり、そういう時は善意がフル稼働します。かつての日本もそうですよね。聖戦、アジアの解放をするためだと、自衛戦争なんだと、そう言いながらいっぱい人を殺しました。

ノルウェーの刑務所、刑期を終えて出所する際の条件は2つあります。最高刑21年ですよ、どんなに悪事を為しても。でも、出所する時には条件が2つあります。どんな条件か。1つは、家があること、住まいがあること。もう1つ、仕事があること、これが条件です。これがないと出所できません。ない場合どうするか。国が保障します。過渡期住宅という犯罪者たちが出所して、過渡期で住むマンション、そこも取材しました。普通の住宅地に

ありましたね、すぐ隣が保育園でした。住民運動起きないんですかって訊いたけれど、全然起きないそうです。事故も起きていない。

日本の場合どうか。もちろん日本の場合も刑務所で一応労働がありますから、出所するときにお金もらえます。ただ、日本の刑務所内労働というのは、時給にしたら十何円とか、凄まじい労働条件です。だから、多分もらえるお金は15万円とか20万円とか、そんなもんですね。そんなお金もらって20年間社会から隔離されて出てきて、何ができますか。携帯電話も知らない、Suicaも知らない、アパートも借りられない、十何万円じゃ。日本の場合、特に身内に犯罪者が出た場合は隔離します。隔離じゃないな、絶縁します。頼る人もいない。どうするか。その結果として、再犯率が高いとみんな怒ってます。逆です、発想が。クリスティが僕に言いました、「私は世界じゅうの刑務所を歩いて回っているんなりに会ってきた。でもモンスターには今のところ1人も会っていない。君は会ったことあるか」と。「いや、僕もない」と。「おかしいね、モンスターはどこにいるのだろう」と2人で笑っていました。

みんな普通の人間です。普通の人間が、ある時は標的になってしまう。モンスターのよ
うな悪にされてしまう。それは「危険な存在」ということで。それによって戦争が始まり、
虐殺が始まるといった状況がある。だから、この連鎖を断ち切るためには内なる善を見詰
めることです。そろそろそれをしないことには、本当に取り返しのつかない状況になるん
じゃないかという気がします。

以上、御清聴どうもありがとうございました。

司会： 森さんどうもありがとうございました。

第二部

司会： それでは、お待たせしました。2時半になりましたので、今から後半部分、お2人のコメントとフロアも交えてのディスカッションに入りたいと思います。今日はコメントーターとして鈴木謙介さんと原口剛さんをお願いしました。皆さん御存じのように、お二人は若手の研究者として非常に活躍されている方ですので、今の森さんの報告、基調講演を聞いて、それに関連させつつ、それぞれ御自身の問題把握なり、また実際の現場からのコメントが聞けると思います。

じゃあ、鈴木さんよろしくをお願いします。

鈴木： 鈴木です、よろしくをお願いします。今日は幾つか話をする論点を考えてはきたんですけども、大きく言うと2つあって、そのうちの2つ目は後でディスカッションのときにお話することにして、1つ目の内容を、15分ぐらいでお話をしたいと思いますね。

先ほどの森さんのお話、一言で纏めちゃうのは失礼なんだけれども、一言で無理やり纏めてしまうと、見えない敵への恐れと排除と言った時に、誰が誰を排除するのか、その「誰が」の部分に「私たち」、あるいは「私たちの善意」というものを代入した、そういうことだったと思うんですね。だからこそ、その善意について私たち1人1人が見詰め直さねばならない、そういうお話だったと思うんです。

そこで僕は、じゃあ「私たち」というものの中身が今どうなっているんだろうという形で少し話をしてみたいんですね。というのも現代では、「戦争」という言葉を使ったときに指す出来事が、国家と国家の戦争によらないからなんですね。そのあたりのことを少し社会学者らしく、きちんと定義に沿ってしゃべってみたいと思います。

戦争というのは何かと言うと、国際法上の手続にのっとって宣戦布告をして国と国とが交戦状態に入ること、これを戦争と言いますね。逆を言えば、宣戦布告なしに他国に軍事



的に攻撃を仕掛けることは侵攻とか侵略、あるいは国と国との争いではないものは、例えば紛争とか内戦と呼ばれます。そういう意味でいえば、「戦争状態にある」なんて言い方をよくするんだけど、本来の定義としての戦争は国同士で争うもの。その背景には、ヨーロッパで展開された血なまぐさい戦争の歴史があって、それに対するある種の反省から、単なる殺し合いじゃなくて、戦争するためのルールを決めましょうということになってきた。これがウェストファリア条約以降、つまり近代国家というものが誕生して以降の戦争の基本的な形態だと見なされています。

さて、僕はいま「軍事戦争」の話をしました。つまり、国と国とが軍事的な力で争うことを戦争と呼んだんですけども、20世紀はどういう時代だったかということ、この「軍事戦争」が「経済戦争」に移行した時代なんです。つまり、20世紀の前半が世界大戦の、軍事戦争の極致の時代だったとすると、20世紀の後半は冷戦があり、あるいは代理戦争があり、あるいはその過程の中で、元々発砲率が低かったものを、発砲率を上げるために非人間的な軍事訓練を施していくという、そういうことも行われていたけれども、建前上は核の力によって互いににらみ合いをきかせながら経済戦争を戦う、こういうシステムになっていったんですね。

1945年に、日本も戦争に敗れました。戦争に負けた私たちは、「もう二度と過ちを犯しません」と言って軍事力を放棄し、軍事戦争をやめました。しかし、経済の分野で戦争は継続されたんですね。例えば今でも会社なんかに行くと、同じ作業をしてるチームのことを「部隊」なんて呼んだりしますね。あるいは「経営の指針」のことを、まさに軍事用語を使って「ストラテジー（戦略）」という言い方をしたりもする。こうして見てみると、私たちの使っているビジネス用語の中には、戦争、あるいは戦場で使われる言葉由来の用語が非常に多いということに気づくと思います。つまり、私たちが今まで生きてきた20世紀の社会というのは、根本的には軍事戦争を戦っていたシステムを使って、軍事ではなく経済で戦争をするようになった、そういう社会になった。それが20世紀の後半の社会だったわけです。

なるほど確かに「経済戦争」と聞くと、80年代には日米貿易摩擦があり、非常に深刻な感情的対立もあって、日本の自動車が米国内で打ち壊しにあったりとかもしてたな、なんてことを思い出す方もいらっしゃるかもしれません。しかしながら現代は、そうした「経済戦争」のロジックから、さらに一歩先に進んだ状況になっているんです。

そもそも、戦争に勝利するとはどういうことでしょうか。軍事戦争の勝利として、よく私たちが想像するのは「殲滅戦」、つまり相手を皆殺しにすることですけども、近代の戦争の目標は、賠償金と領土です。つまり、ある程度のところまで戦争が進行して、だんだん資源が尽きてきたら停戦し、どっちが勝ったか負けたか決めて、勝った方が負けた方に

言うことを聞かせる、こういう仕組みですね。賠償金を課したり、領土を割譲させたり、不平等な条約を結ばせたり、植民地にしたりするわけです。

しかし、第二次大戦後には多くの植民地が独立し、戦争で勝った国が負けた国から資源を買い叩くような、帝国主義的なシステムは維持不可能になります。代わって中心となった経済戦争では、貿易面での勝利、すなわち比較優位性のある資源や製品で外国から利益を得ることが求められるようになります。特に日本のような国にとっては、資源を輸入して付加価値をつけ、加工した製品を輸出するというのが、経済戦争に勝利する唯一の道だったわけです。これは、アメリカが日本製品を大量に輸入してくれたおかげもあって、かなりのところまで成功してきました。

しかし、製造業中心の経済戦争は、石油危機以降に顕在化する資源の限界、そして経済成長がもたらした需要の飽和により、その時代を終えます。代わって登場するのが「文化戦争」です。ジョセフ・ナイの「ソフト・パワー」論が代表的ですが、これはつまり文化的なコンテンツや情報や知識を使って世界で覇権を取っていくことで「戦争」に勝利しようとするものです。例えば、ハリウッドの映画やディズニーのアニメーション、あるいは最近であれば、麻生太郎さんが「秋葉原のオタクの皆さーん」とやってみましたけど、クールジャパンとか知財立国なんて言葉もありましたね。現在争われているのは、単に製品を売ってお金を儲けようということではなくて、情報や知識、あるいは文化そのものを売ってプラットフォームとなったり、世界の人々の共感を得たりする、こういう戦争が起きているわけです。

もちろん、文化戦争の時代になったからといって、経済戦争や軍事戦争がなくなるわけではありません。これらはいわばレイヤー、多層的な構造として世界を覆っている。

ともあれ、現在の日本も、こうした文化戦争のただ中にいます。そこで私たちが直面している問題について、2点ほどお話をしますね。まず、文化的に誇れる、あるいはコンテンツとして誇れるものを持つ国にするための政策が様々な場面で実施されています。例えば、都市の中にエンターテインメント空間をつくって観光客を呼ぶ。景観を良くするために、例えば京都のように、コンビニエンスストアやファーストフードの看板の色に派手な原色を使わないよう規制をかける。こういう、地域性や郷土愛を基礎にして、その都市のコンテンツ力、魅力を盛り上げていくということが行われていますね。

東京都は、2016年のオリンピック招致に落選しました。招致の可能性について疑問視する人はたくさんいたと思いますが、実はそこには社会学で言う「潜在的機能」、つまり、ウラの目的があったんじゃないかと思っています。というのも実は、その「オリンピック招致」で盛り上がっていた真っ最中に、僕は東京の浅草というところに住んでたので、実感として分かる部分があるんですね。

浅草には、隅田川というのが南北に流れてて、その南の方に、第2東京タワー（スカイツリー）が建設されることになっています。そして、2007年には東京マラソンが始まるんですが、応募者が殺到して、10倍近い倍率になるほどの人気イベントになっています。東京都に参加料を払ってマラソンに参加するわけですが、そのコースがものすごく良く出来ていて、新宿をスタートして、そこから浅草の古い町並みを回って南に下ると、お台場なんかの新しい町に辿り着くというものになっているんですね。

それが1日中テレビで中継されることで、東京という町の魅力を新宿から浅草、そしてお台場まで一通り、1日かけて見るができる。同時に、地上の交通全部止まっていますから、使えるのは公共交通機関のみということで、都営地下鉄や都営バスの儲けにもなります。で、浅草に住んでいると、「東京にもオリンピックを呼ぼう」とか、「東京マラソンを成功させよう」とかいうゼッケンをつけたおばちゃんが朝からジムに来て、ガッチャンガッチャンと体を鍛えてるわけですね。つまり、オリンピック招致は、こうした「東京の魅力で人々をつなぐイベント」というウラの目的があって、それは東京マラソンや、その他東京の再・再開発と連動した出来事だったのではないかと、というのが僕の見方なんです。そういえば今年、大阪では水都大阪 2009 というのをやりましたね。大阪の魅力を知ってもらうために、水の都として大阪をアピールしていこうということで。僕も何度か会場に足を運びましたけれども、橋下大阪府知事の視察にちょうど出くわしたりとかして、非常に力を入れていたということが分かりました。

つまり今、都市の魅力や、あるいはコンテンツ力、文化の力みたいなものを盛り上げていこう、それも都市単位で盛り上げていこうという動きは、実は日本のいろんなところで起こっているんですね。クリエイティブな人々を世界から呼んで、世界に対して競争力のある都市を作ろうと。

僕はこれ、全部否定するつもりはないですよ。たとえば先ほど例に挙げた浅草のおばちゃんでも、彼女の郷土愛みたいなものを全く否定する気はないんですよ。でも、その「魅力ある都市を作ろう」、あるいは「綺麗な公共空間を作ろう」というものの裏に排除は無いのか。おそらく現在争われている文化戦争というのは、そうしたきれいな町並みや美しい公共空間を作っていくために、陰で何かを犠牲にしているんじゃないか、というのが1つ。もう1つは、かつての軍事戦争や経済戦争と、文化戦争では、大きく違うところがあるということです。軍事・経済戦争は、一般的に総動員態勢を取ります。つまり、すべての人をまずは軍事、そして次は生産、つまり労働に向けていき、総動員態勢で一致団結して、「進め一億火の玉だ」と言って戦いに向かうと。むろん、一致団結といっても、軍事戦争であれば「男が兵隊・女が銃後」、経済戦争であれば「男がサラリーマン・女が主婦」という非対称な関係がありますが。そう言えば、この前まで、『官僚たちの夏』というドラマ放

送をやってみましたけれども、あれを見てるとよく分かりますよね。護送船団方式を採りつつ、「アメリカに対して輸入規制をして、役所が音頭取りして日本独自の産業を育成する」と。

しかし文化戦争で主役になるのは、簡単に言うと、才能がある人、コンテンツを作れる人、知識を作れる人、情報を生み出せる人。そういう人たちが持て囃されるわけです。例えば、新しいビジネス・アイデアを作れる経営者や、斬新な作品を作って世界で評価される映画監督、そういう人ですね。そういう戦争を私たちは戦っている。そうすると、クリエイティブな人材はすごく持て囃されるんですけど、生真面目に働いているだけの人間は割を食うという、そういう仕組みになっているんです。

「総動員態勢」の下、国民みんなで戦おうという戦争から、才能がある人材をが自分たちの国でクリエイティビティを発揮することで、魅力のある、あるいは比較優位性のある都市や文化を創っていく。こういう仕組みが世界の中で戦われている戦争であって、今の私たちもそれに少しずつ巻き込まれつつある。その時、こういう社会において個人に求められる能力は何かと言うと、クリエイティブであることなんですよ。つまり、生真面目にコツコツと働くことではなくて、創造性がある、オリジナリティーがあって、誰も考えつかないようなことを考えついて、人とは違うことが出来る人材というのが持て囃される。学生さんの中でも、「何か人と違うところ、個性的なところをアピールしないとイケない」という風に思っている人は、多いんじゃないかと思います。

それで、「何か人と違うことをやろう、やらなきゃ」という圧力に晒されていると、何が起るかと言うと、実際に経済的にどれぐらい成功しているかはともかく、人と違う存在になろうとして頑張っている人、努力している人が、そうでない人を排除する、あるいは異物化する、他者化するということが起こるんですよ。つまり、ものすごく成功する才能がある人が一般の人たちを差別するんじゃなくて、そういう人たちに近づこうと、個性を発揮しようと努力している人々、あるいは人とは違うことでお金を儲けようと頑張っている人々が、そうでない、「ただこつこつと働いているだけじゃないかおまえは」、という人間を差別し、排除し、他者化するということが起こる。

昔のマルクス主義でいう「分断統治」といいますか、もし状況が違えば、あなたと私は入れかわっていたかもしれないという想像力が失われて、本当は苦しんでいる人たちが、自分たちより苦しんでいる人を見て、「何であいつらだけが甘えて世の中に食わせてもらわなきゃいけないんだ、俺たちだって割を食いながらも、努力しているのに」という、そういう感情を呼び起こしてしまうことになる。

何を言いたかったのと言うと、先ほどの森さんのお話というのは、「私たちの善意」に注意を促すというお話でした。ですがそこには、大きな「私たち」という一体が想像可能

だという前提があるわけです。人は善意から、同じ人間を守るために誰かを排除しようとする。しかし、そもそも同じ「私たち」の範囲がどんどん狭くなるようなメカニズムが、例えば文化戦争の中で働いているのだとしたら、そのことについて考えておかないと、何故私たちがかくも優しいにもかかわらず、つい人を排除しがちなのかということについての現代の状況、つまり昔から確かにそういうところはあるんだけれども、現代の状況について考えることは出来ないだろうと。

つまり、排除する主体としての、「私たち」の単位が小さくなっていけばいくほど、「私たち」の中での連帯感は強まるんだけれども、その私たちの連帯を支えるために、誰が犠牲になっているのかとか、あるいは誰がそこから排除されているのかという話が欠落していき、「そうだね、私たちみんな同じだよ」とごく少数の人で納得しているような状況を生んでしまうかもしれない。そのことについて考えた上で、恐らく、じゃあ私たちの善意というものが排除している、見えなくしている敵、あるいは敵対していく行為は何なんだろうということ考えた上で申し上げたい、そんなことをちょっとお話を聞きながら思ったんですね。

司会： ありがとうございます。極めて簡単に私の方で要約すれば、森さんが言う「私たち」ということすらも成り立たないぐらいに、今、分断状況というか、意識しないけれども、中がずたずたになっていっている社会の状況が、これは恐らく鈴木さんたちの世代のリアリティーとしてある。そのことをどう考えるのかという、そういう意味で問いかけ、批判的コメントというふうにとめました。

続きまして、原口さんの方から、コメントをお願いします。

原口： 原口と言います、よろしくお願ひいたします。僕が研究の中心的な課題としているのは、寄せ場として知られる釜ヶ崎の戦後史なのですが、それと並行して、現在の野宿生活者を巡る状況についても、どのような排除のロジックが働いているのか、そして排除に対してどういう抵抗が繰り広げられているのか、あり得るのか——そういうことも考察してきました。なぜかという、たび重なる排除を現実に目の当たりにして、そういうことについて考え、発言せざるを得ない状況あるからです。それはまさに、「日常化された戦争」という本シンポジウムのテーマにピタリと当てはまる状況ではないかと思っています。

今日は、大阪での野宿者に対する排除やそれに対する抵抗、その具体的な例を写真を含めて幾つか紹介させていただきながら、森さん、鈴木さんの議論を受けて、後のディスカッションをより立体化できるように、論点を幾つか提示させていただきたいと思います。ま

ず、あらかじめ準備しました本題に入る前に、森さんの講演の中で印象に残った点をコメントさせていただきます。僕は、映像で紹介されていたノルウェーの刑務所についての森さんの解説を、野宿者をめぐる状況と重ね合わせながら興味深く拝聴しました。野宿者に関しては、1990年代後半からホームレス対策という形で「自立支援政策」が始まるわけなのですが、そのなかで最初に用意された対策は、シェルターと呼ばれる緊急一時避難所の設置でした。しかしその居住環境たるや、先ほど森さんが紹介されていたノルウェーの刑務所からほど遠い、劣悪な居住環境なんですね。犯罪を犯したわけではありません、失業して野宿になった。しかしそういう人たちが監獄レベルのところ押し込まれるという状況がある。森さんの講演からは、あらためてその異様さを思い知らされました。その点を念頭に置きながら、森さん、鈴木さんの議論を受けて、僕の方からコメントという形でプレゼンをさせていただきたいと思います。

まず、ここ10年のあいだに野宿者をめぐる状況がどのように推移してきたのか、という点について、すこし説明させていただきました。僕が大阪に移住してきましたのは、ちょうど2000年のことでした。それから9年間、この大阪で研究を進めてきたわけなんですけども、そのなかで、2000年以降過去3回にわたる強制撤去——これは正確に行政代執行法という法律に則って行われたのですが——を目の当たりにしてきました。1回目が2003年、天王寺公園青空カラオケに対する行政代執行。そして2006年、大阪城公園及び靱公園のテント村に対する行政代執行。それから、翌2007年には大阪南部の長居公園で行政代執行が行われました。これは、異常事態なんです。行政代執行を用いた強制撤去は、それを実施するのが躊躇われるぐらいの、ものすごい強力な権力を発動させるということなんですね。それが2000年代に入ってから3回も遂行されている。しかも2006年の代執行の後、わずか1年後という短いスパンで、ためらいなく遂行されている。目下、そのような異常状態にあります。

この写真は、2007年長居公園における行政代執行の、最も緊迫した瞬間を撮影したものです。白いヘルメットを被った市職員がテント前を取り囲んでいる姿が見えますけれども、更に幾重にも渡って、警察官であったり、ガードマンであったり、そういった人々が取り巻き、対立させられている状況です。これは見たままに「日常化された戦争」の光景なの



ですが、この光景が戦争を連想させる理由はそればかりではありません。強制撤去の瞬間に、実際にテント村の当事者と対立させられるのは、市職員や警察官やガードマン、破壊

された小屋をトラックに乗せるフリーターの労働者といった人々ですが、彼らは本来であれば話し合えば分かり合えるはずの存在です。みな一歩間違えばひよっとしたら野宿生活者に陥るかもしれない、似たような境遇を生きている。つまりここでは、都市の中でも低賃金で不安定な労働に従事している、そういった立場の人々が、互いに対立させられるんですね。つまり、戦争を決定する、あるいは行政代執行を決定する政策決定者はその場にはいない。排除の現場では、同じような境遇の人々が対立をさせられる。これはまさしく日常化された戦争の局面だと、僕はそう思うのです。

次に、行政代執行、強制撤去が持つ意味を押さえておきたいと思います。行政代執行は、正確に言うと、人に対して作動されるのではなく、モノに対して作動される。つまりテント小屋を不法物件として壊すんですね。一口に野宿といっても2つのタイプがあります。1つは、小屋を持ち定住しているタイプ。もう1つは、皆さんも目にしたことがあると思いますけれども、屋根をもたず、段ボールなりを地面に敷いて横になるタイプ。後者は「露宿」と呼ばれます。言うまでもなく、露宿というのは非常に過酷な生活です。雨や暑さや寒さが直接に身体をむしばむ、その中で生きていかざるを得ない生活です。繰り返しになりますが、行政代執行が破壊するのはテント小屋です。つまり「テント作るな」と、「露宿をしろ」と、そう言っているようなものですね。ここで、次のような事実を考えなければなりません。調査可能な範囲だけでも、大阪市内で年間200人以上の人々が路上で亡くなっています。テントを壊すという行為は露宿をふやすという帰結をもたらす。露宿の生活で、年間200人以上の方々が亡くなっている。とするならば、テントや小屋に対する強制撤去とは間違いなく、「社会的な殺人」もしくは「緩慢なる死刑」を意味することになるのです。

もうひとつ、強制撤去の局面において、野宿者とガードマンや市職員が対立させられるということの意味を考えてみたいと思います。資料としてお配りしました新聞記事では、長居公園を撮影したドキュメンタリー『長居青春酔夢歌』が紹介されています。その記事の中で、「野宿者の立場に思いを寄せて涙を流す警備員の姿もいた」という一節が、真ん中のちょっと下にあります。そうなんです。人は人をそうたやすくは殺せない。同じように、物理的な暴力をもって排除することを、楽しくやれる人なんていないんです。そのことは、繰り返し主張したいと思っています。

それでは、強制排除を作動させるロジックとは何なのか。その根幹にあるのは、先ほど鈴木さんが指摘されていた、文化戦争下における良き都市空間作りという要素です。例えば、2006年の靱公園・大阪城公園のテント村に対する強制撤去はなぜ行われたのか。その背景にあるのは、「世界バラ会議」というメガイイベントなのですね。このイベントを開催するために「テントが邪魔だ」ということで排除された。翌2007年長居公園の場合も

また、強制撤去の背景にあったのは世界陸上というイベントでした。文化戦争、都市間競争のために犠牲になっているものがあるのではないかと、そう鈴木さんが指摘されていましたが、その1つの典型が、これら強制撤去の光景なんです。いま現在は、東京渋谷の宮下公園ナイキ化問題が問題になっていますね、この問題にも同様のことが指摘できると考えています。

さて、これまで野宿者の排除をめぐる論点をいくつか提示しましたが、ここで考えたい問題は、このようなイベントに伴う排除や暴力が市民的な了解を得てしまっているということです。強制撤去や行政代執行は、陰に陽に、市民に支持されてしまっている。そうでなければ、行政代執行などという強権的な手段を乱発できるはずはないのですから。なぜ強制撤去が支持されてしまうのか。そのことを考えるためにはおそらく、「世論的なレベル」と「近隣的なレベル」という、2つのレベルを峻別する必要があると思うんですね。まず「世論レベル」でよく引き合いに出されるのは、道徳的な非難です。つまり、公園は住むところではない、公園を本来の姿にするべきだという非難。行政代執行を正当化する行政的な用語が「公園適正化」だということも、これに相通ずるでしょう。このような道徳的非難に対しては、例えば次のように批判しえます。震災の時に災害に遭われた方のために、公園にはテント村が用意されますよね。つまり公園というのは、緊急時の避難的な機能を持っているじゃないかとか。反論の仕方のひとつとして、そういう論じ方はあり得るのですが、しかしどうも自分で言っていて、的を外しているような、何か違うなという感じがあるのも事実です。結局のところ、鈴木さんが著書のなかで論じられていたと思いますが、何が本来の公園か、公園の本質はなにかという問いは、いきつくところまでいきつく、審美的な問題、神学的な問題に帰着せざるを得ない。永遠の水かけ論になってしまうんですね。



だから、公共空間に関しては、「これが本質だ」「これが正しいあり方だ」というのとは違う、別の語り口というのを僕らは発明していかないといけないだろうなと思っています。ではどのような語り口がありうるのか。これが、僕のほうからの問いの1つです。

もう1つ、「近隣レベル」で問題となるのは、不安です。これを象徴する典型的な事例があります。1990年代後半、長居公園で野宿者のテントが急激に増えたときに、野宿者が近隣に住む女性をレイプしたという噂が広まったんですね。これは後に事実無根だということが判明します。しかし、なぜそのような噂がまことしやかに流布してしまったのか、ということは考えないといけない。つまり、人々の目に野宿者のテントが写りこんだ、ただそれだけで人々は不安を感じてしまう。野宿者や彼らのテントは、その存在や見た目だけで不安を引き起こす。そして彼らは近隣にとって不気味な存在、潜在的な敵として措定されてしまう。こういう実態があります。

では、不安の正体は何なのか。近隣住民の方に直接インタビューしてるわけではないので、憶測でしかものが言えませんが、今までの議論の中でヒントは幾つか頂いたと思います。森さんは、分からないから怖い、顔が見えないから怖い、そうおっしゃっていましたが、これは大いにあり得る視点だなと思ったんですね。同時に、もしそうであるならば、解決策もみえてきます。顔が見えないということが不安の根源にあるとするならば、必要なのは、顔の見える関係性を築くことです。

不安をめぐるって、別の側面からは、実は不安の正体は別のところにあるのではないかと考えられます。いまの学生を見ていると、人生を一度でも何らかの形で踏み外すと、二度と這いあがれないところまでずぼんと落ちてしまう、そういった恐怖感を感じているように見受けられます。そういった恐怖感を内側に潜めているのであれば、当然ながら人々は焦り、不安にもなるものですね。そのような内なる不安が、野宿者に対する不安というかたちで投影され、転化されてしまっているのではないかと。もしそうであるならば、不安を解消するために必要なのは、人生を歩むうえで万が一足を踏み外しても生きていける、やり直せる、そうしたセイフティ・ネットを生み出すことです。

以上を踏まえまして、最後に、希望のある論点を提示したいと思います。僕たちの現在が日常的な戦争下にあるとするならば、ひるがえってこういう問い方もできるはずですね。多くの戦争が、それに対する反戦運動を伴ってきたように、日常的な戦争に対する反戦ということも考えられるのではないかと。では、それはどういった形をとるのか。国家間の戦争と位相が異なりますから、日常的な戦争に対する反戦というものは、きっといろんな形を取り得るはずですね。そのヒントが実は、テント村にあるのです。これを、長居公園の事例から僕は引き出していきたいと思っています。

まず、先ほど不安をめぐる論点のなかで「セイフティ・ネットを生み出すこと」の必要性・

重要性を指摘しましたが、テント村は人生において頼ることの出来る最後のセーフティ・ネットという意味を確実に持っています。テント村には実にいろんな機能がありうるのですが、たとえばこういった風景ですね。人々が談笑している、他愛のない風景です。ここで談笑しているテント村の住人は、確かに、経済的には困窮しています。しかし、この光景からわかるように、社会的な繋がり、人間関係の繋がりがテント村には確かに存在している。テント村があることによって、拠点があることによって、排除された人々はそれでもなお社会的な接点を維持することが出来る。つまり、孤立しないで済むのです。そこで色々とおしゃべりをしているうちに、どういう資源を活用できるのかということ学んだり、もう1度別の生き方で頑張ってみようという意欲が起こったりもします。このテント村という拠点では、お互いの水平的な関係性のなかでそういうプロセスが起こりえるのです。もうちょっと大きな言葉で言うと、テント村というセーフティ・ネットがあることで、人生は1本じゃない、落ちてもいい、そこにも世界がある、そういったことを確信することができる。そこには、オルタナティブな社会が、そしてそこから広がる世界が存在しているのです。主流社会からはなかなか見えにくい、もうひとつの社会、あるいは空間へ接するきっかけ、入口としての機能をも、テント村は確実に果たしていたのだらうと思います。

それから、先ほど不安の話をするなかで「顔の見える関係性を築くことが重要だ」とも申しました。そのことを念頭において、この写真をご覧ください。これお祭りの風景です。テント村は、毎年お祭りを長居公園で開催していたんですね。自分たちのためのお祭りというだけの意味で開いているわけではありません。地域住民もぜひ来てくださいと、一緒に祭り



を楽しみましょうと、そういう趣旨の祭りです。「大輪祭り」といって、テント村が強制撤去されてしまった今でもなお開催されています。このお祭りには、実際に近隣住民の方が遊びに来るんですね。それから、テント村の住人たちは自分たちで農園を借りて自分たちで野菜を作っています。その野菜を、カンパという形ですけども、近隣住民に販売をするんです。この営みはちいさいながらも非常に重要な意味をもっています。先ほど、顔がみえないことが不安の源泉なのではないかと述べました。近隣住民に野菜をおすそわけするという行為は、わからなかった、顔の見えなかった関係性を、顔の見える人間のコミュニケーションへと組み替えているんですね。こういった地道な活動によって、近隣住民と野宿者のテント村との実質的な交流が、小さいながらも確実に生まれたのです。かつ

てレイブ疑惑さえ流布したこと考えれば、これがいかに劇的な変化であったのかがわかるでしょう。お配りした資料の新聞記事には、「おれはここにいる、おまえはここにいる。だから繋がりがあがる」とテント村住人の文言が記されています。テント村はこの原理を、祭りの開催や野菜の販売というかたちで実現させていたのです。

日常化された戦争に対する反戦、という論点につきましては、もうひとつ、ぜひ紹介したいことがあります。テント村の住人が行政代執行、強制撤去に対する抵抗として採った手段がとても興味深い。彼らは、芝居を演じたのです。強制撤去の光景を映し出したこの写真には、バナーに「争いではなく話し合いを」というメッセージが刻み込まれています。ここには、私たちは敵ではないというメッセージ、私たちはわかりあえるはずの存在だというメッセージが込められていました。そしてテント村の住人や「支援者」は、芝居という手法によってこのメッセージを警備員や市職員に懸命に伝えようところみたのです。これは、戦争的状况に穴を穿つような、極めて有効な訴えの手段だったと思います。

こういった抵抗を編み上げていくなかでは、もちろん演劇関係者が絡んでいます。それから、僕みたいな研究者、僕だけじゃなく、テント村に思いを寄せる研究者も一緒に、抵抗の方法を模索しました。メディア・アクティビストも抵抗の輪に加わり、それが資料で紹介したこのドキュメンタリーとして結実したわけです。そういった形でいま、関係性が多様化しつつあり、抵抗がますます豊かなものになりつつある。森さんの講演のタイトルを踏まえ語るならば、世界の豊かさ優しさを引き出すノウハウが広がりつつあります。

さまざまな立場の人々が、それぞれの立場から、自分の持てる技術や才能を生かして、リチャード・フロリダとは違う意味でのクリエイティビティを生かすことができたなら、抵抗をより持続的に、楽しいものに、そして強力なものにできるはずです。たしかに、世の中は戦争的な状況へと向かいつつあります。しかし、このような傾向に対抗しようとする「反戦」のネットワークは、僕の感触で言うと、確実に拡大し、豊かなものになっている。そのことを見過ごしてはならないと思います。

以上、僕からの問題提起及びコメントにかえさせていただきたいと思います。どうもありがとうございます。

司会： ありがとうございます。ここからはフロアに開いていきたいと思うんですが、その前に皆さんに書いてもらった質問票、これは森さんにも見ていただいたんですが、一個一個に答えることは時間の関係でしません。ただ、大きく幾つかの傾向として、映像で紹介されていたノルウェーの事例ですね。それにやはり驚く。そして驚くと同時に、それを以て我が身や我が社会を振り返ったときに、色んなものが見えてくるという。

そういうところに比べると、実は大学のキャンパスの禁煙キャンペーンで捕まったり、

反省文を書かされるということは、ノルウェーの刑務所以上に不自由だということもあります。そういうことは、多分きょうのディスカッションの最後にまた戻ってくると思います。

とにかく、紹介いただいたノルウェーの事例を見ることによって、この社会を考えたときに、どういう風に見えてくるのか。おそらくあれを見ると、あちらの事例が特異に感じると思うんですよね。けど、よくよく考えると、もしかすると我々が当たり前だと生きている社会の方が、特異なものを含んでいるんじゃないかというところに、フロアを交えて最後には議論を持っていきたいと思います。

まずは、森さんの方から、今のお2人のコメントに対してレスポンスというか、さらに問いかけていただくということから始めていきたいと思います。

森： 鈴木さんと原口のお話については、「そうなのか」と頷くことばかりで、特に僕の方からレスポンスというものはないので、今のご質問、学生の質問についていいですか。

僕も禁煙2週間目なんで、タバコ吸う人が憎くてしょうがない（会場笑）。だから、喫煙者はどんどん死刑にすればいいと思ってますけど（会場爆笑）。

ノルウェーについて言えば、確かに特殊な事例と思いがちなんですけども、ロケのコーデネーションをやったのが、日本人女性、20年向こうに住んでいる方が言うには、とても気質は日本人に似ているというんですね、ノルウェー人。シャイで、目立つことが好きじゃなくて、どちらかというと団体行動が好きで、だから、その辺は日本人に似ているので、決して日本にも可能性がないはずはないんじゃないかなと思っていました。

やっぱり、今回つくづく思ったのは根本的な部分ですね。罪と罰です。罰って何だろうと、罰は苦しみを与えることと無条件に思っていましたけど、本当にそうなのかどうか。ニルス・クリスティはこう言いました。「犯罪者のほとんどは、これまでさんざん苦しみを背負ってきたから犯罪者になったんだ。そこにさらに苦しみを与えてどうするのだ？」って。法



務省の高級官僚は、インタビューでこう言いました。「犯罪のほとんどは、貧困と幼いころの教育、あと愛情の不足、この3つの要因から生まれる。ならばそれを補完すればいいだけのことだ。確かにごく稀には、いわゆるサイコパス。人格形成にゆがみがあるような、快樂殺人をするような人がいるかもしれない。でもそれは病気だから治療をすればいいだけのことで、その人に苦しみを与えてもしょうがない」。やっぱり罰は苦しみを与えることなんだという、何かそれは因果応報ですよ。こちらが苦しんだんだから苦しみを与えるという。それは、もちろんこれは人情として否定しきれないけれど、その輪廻から脱却しないことには、新しい次元というのは見えてこないんじゃないかなという気がしました。

鈴木： 森さん、ちょっとお伺いしたいんですけどね。ノルウェーの社会が一体どのぐらいの人の流動性がある社会なのかというのが、ちょっと気になったんですよ。というのも、社会に帰してあげなければという言葉が何度か出てきたと思うんですけど。おそらく、今の日本の社会が置かれている状況って、人口が多いかどうかはともかくとして、社会に帰してもらっても受け入れる余裕もないし、何かほかから人がいっぱい来るので帰す必要はない、そういうことだと思うんですよ。

アメリカみたいにもすごい数の受刑者が収容されていると、もう刑務所が限界だから社会に返そうという話になると思うんですけども。実際は犯罪件数が少なく、帰ってこなくてもたいして損をしないと多くの人が体感できる状況だと、いや、帰さないとやっぱりまずいということにはならない気がして。どうも、北欧社会で、一般的にはヨーロッパの中でも時々厳しい環境に置かれてきたから、その国の中での一体感というのはもともとすごく強いという傾向がありますよね。

そういう北欧全体の国の中で、自分たちで自分たちを守らなければという気質が、何となくやっぱり私たちの仲間を社会に帰さないと、という感じになっている気がするんです。どうも日本だと、そういう風に言われても、「いや、別に帰してもらわなくてもいいんだけど」と言われちゃいそうな気がして。その辺、ノルウェーでは何であんなに社会に帰さなきゃとみんな思うんだろうというのが、僕の実感すごくうらやましいというか、不思議というか、そんな感じがしたんですけど、その辺どうでした？

森： そこは、僕はまだ明快な回答を得てないですけど。ただ、本当におっしゃるように、一体感は強い国でしょう。こじんまりしていますから。ただ、最近はパキスタンからの移民がすごく増えてるんですよ。やっぱり、それにとまって犯罪も増えてます。だから、一部で厳罰化を再開した方がいいんじゃないかという声が上がっていることは確かですね。今のところは、まだそれは全然主流派にはなっていないんですけども。だから、もち

るんアメリカという多民族、多言語、多宗教の国であれば、同じようなパラメーターで考えるべきではない、とは思いますが。日本とノルウェーの比較の場合は、人口も経済状況もかなり違うけれど、ただ、国家としての一体感や同質感みたいなどころでは結構似ているような気がします。だから、少なくともアメリカにこの方式をすぐにやれと言っても無理なことはわかっていますが、日本だったらもう少し可能性はあるんじゃないかという気もするんだけど。

でも僕の実感で、日本はノルウェー的なメンタリティからは今、最も遠い国だなという気もしないでもないで、その辺はやっぱり毎晩考えている最中です。逆に、だからきょうのディスカッションでそういった討議ができれば、日本人論になっちゃうんですけどね、おもしろいと思いますけど。

司会： そのこのところで、多分コメントで鈴木さんが言ってくれた、私たちがどう捉えるかということともかかわると思うんですが。だから、社会に包摂すると言った時は、私たちの社会に包摂するということでしょう。多分、鈴木さんの感覚では、いや、そんなことはできないし、どだい難しいし、そんなんだったら無理して帰すことはないという感覚があるとしたら、それは文化論で語るのではなくて、ある種の時代論なり、ある種の階層論、世代論で考えると、どのあたりからそういうものが出てきて、私たちはもう成り立たないし、私たちの社会に包摂するなんてことよりも、もう何処かに行って欲しいとか、場合によったら消えてなくなって欲しいみたいな感覚が高まってきているという。

鈴木： 歴史的にいろんな段階があったんだと思うんですよ。つまり、私たちの社会と言ったときに、その社会というのは一体何なのかと言ったときに、例えばそれは地域の共同体だとか親族のつながりだとか、そういうものを例えば社会学者は想起しますよね。ところが、戦後の社会が考えてきた社会とは何か。例えば皆さん「社会人になる」ってどういう意味ですか。仕事を持つことを社会人になるって言いますよね。

僕、昔、イタリア人の留学生に学生のころ、「何で日本の大学生は参政権も持って税金も払っているのに社会人じゃないの」と言われて困ったんですけども。日本では仕事をしていること、そして昔だったら、その仕事をした結果によって家庭を持つことが一人前の社会人の条件だったという風になっていったんですよ。そうした経済のユニットを家という単位で回していくために、地方から「金の卵」という形で、若者を集団就職で引っ張ってきて、都市に住まわせて、住んだ人たちの中でちゃんと仕事できた人は家庭を持って、その人たちが郊外の一戸建てに住んで、その一戸建てのマイホームを守るためにまた仕事をしていたと。

1977年に放送された『岸辺のアルバム』という有名なドラマの話を挙げましょう。これは多摩川の水害で家が流されるという、1974年に実際に起こった災害のドラマ化なんですけど、その中で昭和一ケタ世代のお父さんが、家が流されそうになって、避難勧告も出ているのに、「この家が流されたら、俺はもう終わりだ」と一生懸命家にしがみついている。つまりマイホーム主義です。社会じゃなくてマイホームを守ることが、多くの人たちにとって社会そのものだった。

そうすると、これがさっきの「犯罪が許せない」という話と関わってくるんです。犯罪は確かに1%ぐらいして起きてないかもしれない、1件か2件ぐらいしか凶悪犯罪は起きないかもしれない。けれど、マイホームを守るという立場からしたら、一件でも起こってそれが自分の家に当たったらだめなんです。そうすると、社会全体のことでなく、我が家に何が起こるかということで考えないといけなくなるから、1%でも、0.1%でも事件は起こってはならないとなっていく。

そうした中で、社会というもののイメージが、「家庭」というすごく小さなユニットに集約されていったときに、おそらく治安の問題とか諸々というのは出てくるんだけど、それこそ原口さんがやられているような野宿者問題だったり、あるいはそこに集まってくるような、あるいはそれを排除しなければいけないような不安定な労働者たちというのは、まさにそうした、これまでの社会、あるいは社会人というところからこぼれ落ちてきた人たちじゃないですか。

僕がさっきの原口さんの話の最後を聞いて、なるほど、やっぱり文化戦争に抵抗するには文化しかないのかと思ったんだけど。そこですごく気になるのは、まさに僕らが社会、社会と言った時に、つい「社会人＝会社人になる」と考えている、その外側に、「生きた社会」というのがきつとあると思うんです。社会を生きること、その豊かな社会性を引き出ししているというか。原口さんに、その社会の豊かさのイメージみたいなものをもうちょっと説明してもらえると、僕らを取り戻すべき社会のイメージというものが見えやすくなるのかなと思ったのですけど。

原口： 社会の豊かさのイメージを語るうえで、豊かさのひとつの指標として、どれだけ逃げ場があるかどうかが重要だと思うんですね。「逃げ場」というのは公園のベンチでもいい、近所の立ち飲み屋でもいい、何処でもなり得ると思うのですが。近所の立ち飲み屋でもいいし、公園のベンチでもいいし。対して、監視社会化やセキュリティの上昇のなになが問題かという、それが逃げ場、たとえば隠れて何かをするスポットであるとか、そういった場所を潰してしまう、とういことなのだと思うんですね。ストリート・パフォーマンスなんかもそうですね、いまや管理の対象になっています。あらゆるものが管理の対象

になり、ここはこういう土地だからこれ以外のことには使わないように、という形で、土地が厳密に区分けされていく。そうして逃げ場がどんどん潰されていく。そのようななかで、ちょっと現実社会から距離をとることのできる、現実社会の主流から距離をとることができる逃げ場をどのように作り、確保することできるのか。これはあらゆる階層にとって、あらゆる人々にとって重要なことではないかなと思うんですね。

そういった逃げ場の一つがテント村だったわけですが、かといって必ずしもテント村だけが特権的な場所というわけではない。逃げ場をつくることは様々な形で可能だと思うし、またそうした動きも、僕の感覚から言うと広がりつつあるように思います。育ってほしいな、と思う願望も込めて。

それから、社会包摂という論点が出てきましたが、野宿の現場では非常に重要な論点なので、もう一步深めさせていただきたいと思います。近年、社会包摂という言葉をよく聞きますよね。いまや主流になるつつある言葉ですが、これは非常に様々な可能性を持っている一方で、ものすごく危険な部分を持っている。例えば障害者であったり、野宿者であったり、これまで周辺化された人々を社会なりコミュニティなりに迎え入れると、そのような含意をもつ言葉で、基本的に僕は応援しています。応援していますが、危険な部分があります。

野宿者を例にあげると、行政が用意した自立支援の道筋に沿う野宿者は、主流社会からするとウエルカムです。そういった姿は、美談として例えばテレビのドキュメンタリーに登場したりもする、そういった形で主流社会に拍手を持って迎え入れられます。対して、例えば野宿者が自分の権利を主張したとき、事態は反転します。一斉にバッシングです。つまり、社会包摂という言葉の限界は、社会がその体制を維持し得る範囲内に身体や精神が規律された、あるいは規律しようとする人々には門戸を開くけれども、社会を根底から問うような主張、自分自身の権利を主張する野宿者に対しては非常に冷たいものです。野宿者は弱い存在、従順な存在でなければいけないという、そういった野宿生活者に対する選別を根底にはらんでいる可能性は極めて高い。

森さんにお伺いしたいんですけども、このような危険性は日本固有の現象なのでしょうか。これを日本文化論として語るべきなのか、あるいは社会が持つ普遍的なロジックとして考えるべきなのか。この点に関して、何か意見があったらお伺いしたいと思います。

森： まず、社会包摂性についてももう少しセキュリティという部分でしゃべれば、さっき鈴木さんがおっしゃったように、要するに社会にとっての治安であったりとか、あるいは安全性であったりと、そういったことをお題目はみんな口にするんだけど、実は本音はそうじゃないわけですね。やっぱり自分の家を建てたり、自分の家族を守るとか、結局はそ

こから来ているわけで。だから、今の日本という国は、僕はある意味で一番社会性からどんどん遠ざかっているというか、社会学的な部分がとても弱くなってしまっている。もっと言うと、社会学の権威がもっと頑張らないといけないんじゃないかという、そういう状況になりつつあるんじゃないのかな。

みんなやっぱり自分の家とか自分の家族が前面に出ると、やはり被害者意識が際だってくる。ある意味で仕方がない。だから社会への論理的な解析、危機の計測の仕方などが重要なんだけど、そんな意識が消えてしまう。社会がどうであれ自分の満足感さえ上げればそれでいいんだという、どこかにそういったエゴイズム的な部分があるからこそ、今のこの状況はちょっと来ているんじゃないかなという部分。そしたら、今日の冒頭で言いました、リスクとハザードというものが混濁してしまうという、そういう状況になってしまっているのではないかなと思って。

ノルウェーにも今おっしゃった危険性というのは、十分にあると思います。やっぱり少数派排除なんです。危機意識が高まれば。それはやっぱり、人間みんな基本的に持っているものじゃないのかな。別に日本人だけがではなくて、人類全般にそういった排除の思想であったりとか、フォビアであったりヘイトであったりとか、そういったものが古い地層のように、何かの拍子に現れる。日本人はその表皮が薄いですよ、すぐそれがあらわれてしまう。だから、薄い理由は何かなとずっと考えていますけどね。逆に、鈴木さんに聞きたい。

鈴木： 僕が理由を説明できるかどうかはわかりませんが、1つは家庭という、1つのマイホームが共同体の単位として定着していくことは、結局のところ元あった地域の共同性、歴史であるとか文化であるとかを踏みつぶしていくことだったということですよ。空っぽのマイホームには、たくさん働いて、たくさんお金を得たら、たくさん家電品とか家財道具が増えるよ、それが豊かさだよという形でいろんなものを購入してきた。さらに、1回全部更地にしたところで、その更地につくった家の中にたくさん文化、というか文化産業の結果としての商品を放り込んで、それを「文化」としてきた、多分そういうところがあるんですよ。

迎え入れるべき社会は既がない。けれど、マイホームの中で豊かさを享受している人たちが、ある程度似たような階層に属していれば、それをあてにして地域の絆を作ることはできたんだと思うんです。むしろそれは一方で、ちょっといい車を買って陰口を言われる昔の社宅みたいな陰湿な部分もあったのでしょうか。ところが、そうした地域の中に、お金を持っている人もお金を持っていない人もいるというか、マイホームを持っている人もマイホームを持っていない人も存在するというようになってきたときに、元々潰してしまっ

た、更地にしてしまったダメージがあらわれてきたということなんじゃないのかなという気がするんです。

「均質で無個性な郊外」って昔は批判されてましたけれども、均質であるがゆえに辛うじて支えられていた絆があった。その基盤の薄さみたいなものが、今になって、それがもうひび割れただけだということに気がついて、「どうしよう、どうしよう」と。足元は薄氷だぞということになってしまっているんじゃないかな。それを、じゃあどうするんだろうといった時に、今日のキーワードである「見えない敵への恐れと排除」という部分が大事になってくると思います。排除とか恐れとか、やっぱりその見えない敵は誰なんだろうとか、その辺の話というのが実は大事になってくる気がするんです。

つまり、例えば野宿者を具体的に排除している人というのは、やっぱり排除される側と同じような人たちであるとか、結構そういうことってあるわけですよ。つまり、排除している人も排除されてる人も同じような立場に立たされているのに、誰が排除命令を下しているのかが全然見えない。何ならその排除が近所の公園で執行されていても、その近隣の人たちが、そこにやって来て、誰が排除されているのかを見ているということではなくて、気がついたらある日テントが無くなってみたいなことになっているんじゃないか。排除の現場とか、具体的に排除がどこで起こっているのかがよく分かりづらいから、それが自分も当事者性を持った出来事だととらえられなくなっている、そういう状況があるような気がしているんですよ。

そのことをちょっと原口さんに聞きたくて。その地域の住民が、例えば確かに不安を抱えている。暴行されたという噂が出回るといんですけど、じゃあその人たちは実際に、野宿者の人たちとこれまで、何か野菜を売ったりとかするに至るまでの間、どういう形でその地域にかかわっていたとか、これまでどう「敵対」していたのかというのを、ちょっと聞いてみたいなと思ったんですけども。



原口： 僕が来たのは、2000年時点ですので、それ以前のこのの詳細はちょっとわからないですね。なおかつ、近隣の方にも、本来はすべての人に話を聞かないといけないと思っております。実際に近隣の方にインタビューをしたことがないので、ここで言えることはあまりありません。ただ、地理的なことがらについては、若干のことを言えます。長居公園の近隣は、基本的には、まさか野宿者の姿が急増するとは予想だにしていなかったような、閑静な住宅街です。そこに突然失業者が、野宿というかたちであふれ、ブルーテントという異物が入り込んできた。これは憶測ですけれども、おそらくは、余りにも唐突な風景として映ったのであろうと思います。大阪では、野宿や失業、不安定労働といった問題は、釜ヶ崎のような特定の地域に長らく封じ込められていたので、まず接点があり得なかったと思うんですね。それが急に、いきなり接点を持たざるをえないような状況になる。あまりに唐突な、不幸な出会いかたであって、それゆえ過敏な反応になってしまった。そういうことだと僕は考えています。

鈴木： その時に気になるのは、例えば「テントが増えてきた」となって、「どういうことだ」と、その地域の住民が、まずは野宿者たちに「ちょっとどけてくれよ」と文句を言って、どかないのでお上に陳情したという経緯なのか、それとも、何か気味が悪いと思って近寄らないでいたけれども、気がついたら行政がやってきて排除してくれたということだったのか、その経緯です。つまり、先ほどちょっと民意が後押しをして、つまり市民が賛成するからという話がありましたけれども、誰がその「排除」を求めたのか、その辺の感じが分からないので。やっぱり市民が積極的に「排除しろ」という声を上げたのか。それとも、行政の決定に対して、市民の側が追認をするような感じだったのかというあたりが、敵対、排除というもののイメージを豊かにする材料になるのかなと思ったんです。

原口： 2007年の強制撤去に関しては、実は強制撤去を問題視する署名活動に近隣住民が署名をするという事例が結構あったんです。そういうふうには理解を示した人もいるし、おそらく、ずっと嫌がってる人もいるであろうと思われれます。だから、近隣住民と一言で言っても、長居公園自体が大きい公園であるということもありますし、近隣意識が一樣かと言うと、おそらくそうではない。現在でもさまざまだろうと思います。

それから、行政代執行を遂行するロジックと、市民感情との間にはちょっと捩れがあります。行政代執行は基本的に、イベントを開催するための排除として作動するんですよ。別に市民の声を聞いたから排除するわけじゃないんです。近隣住民はお役所にずっと訴えかけていたわけですね。しかしお役所は動かなかった、そういう状態が続いていたわけですね。ところが、世界陸上が開催されるようになった途端に、「市民からのこういう声があがっ

ています」という形で市民の声が流用されてしまうんですね。そういう構造が裏側では働いています。

さらに、そういった市民の声自体、これはきちんと検証しなければならないのですが、実は捏造されたではなからうかという疑惑もあります。だからほんとうは、近隣住民の声をきちんと聞かなければならないのですが。ちゃんと近隣住民の声に耳を傾けて考えるという機会、あるいは場を設けない限りは、確定的なことはちょっと僕からは、今の段階では申し上げられない、という感じですね。

司会： それは文脈が違うけど、さっき森さんが言われてた、視聴者からの抗議があるとそれで放送が出来なくなるのと、ロジックは全く同じですよ。だから、何かがあったときに、それは本当に社会科学的な代表性であるとか、分布ということではなくて、そのことが極めて恣意的に、都合がいいときに「こういう声があるからやめましょう」とか、「こういう厄介なことが起こり得るからやめましょう」ということが、もう1つ我々の今日のテーマである「敵」のイメージが独りでに出来てしまったり、予めあったものが何か実体化されてくるところとも関わっていると思いました。

それで、ここでずっと議論していてもおもしろいのですが、そろそろフロアーを交えての議論に移りたいと思います。

A： 1つ発表されている、今、不法占拠にテント建てている問題点で、関学も現在持っているんですよ。それはどういうことかと言うと、阪神大震災がありましたですね。「関学の運動場に仮設の住宅を建ててください」と、それを言ったんですよ。その時に関学側がした対応は、私は一時的なものがいいと思いますよね。それでもう断ってしまうんですよ。1つの大学経営をやっている、キリスト教、道徳教育もやっている、そういう人たちでもそれを断ってしまうんですよ。その現実がありますね。

それから、これは現実的に取り扱わなければならない問題だと思います。我々は、明治や大正や昭和の歴史を見ても、少年院に入る犯罪を犯してくる子どももいるんです。この子どもたちは、やっぱり家庭教育の崩壊の中から出てきているわけです。それをいくら厳罰に処しても、広島少年院で頻繁に起こっている。現場で起こってます。それは治らない。子供が大きくなって力を持てば、正義感を開放してしまうということが出来るわけですね。

その場合に、タナコウスケという明治初年に生まれた人がやったことは、やっぱり家庭を持たせて家庭の愛情を復活させるという、それをまず東京でやります。けど、東京じゃ狭い。で、北海道に開拓使にパスをもらって、それで農業を開墾させ、それから牛を飼い、



それから農作物を植え、それで生活を出来るようにすると、そういう設計をするわけですよ。だから、そういう設計が出来ないでここで幾らかわいそうだ、かわいそうだという感情論の声をあげたところで何の役にも立たないということが、見えない敵という例として我々全体を動かしているということは分かりますけれども、「どういう政策を打ち出しますか」、「どういう政策が望ましいんですか」ということ。社会学が足りないところは政策を動かさないと、現代人が政策を出さないと、それは解決しない。

それから、もう1つ。だから感情論では何にも解決しません。「かわいそうだ、かわいそうだ、どうしようか。じゃあ、お金献金するか、あるいは税金を置いていくか」ということを、やっぱり社会政策に結びつけた問題解決の方法を出さなければ、現実のこのデータが人の心を動かせるものじゃない、それが第1点。

もう1つ、森さんの話は、これは私もノルウェー人の青年なんかと一緒に学生時代に参画してたんだけど、同じ人間ですわ。誰でも持ってる、すべての欲望も何でも、同じ人間ですよ。森さんはこの今日の例で、「見えざる善を見出せ」と言われた。これは我々の文化の中にたくさんあるじゃないですかということです。それが実現されないで、「俺の言うことが何で分からないか」ということで、腹を切って死んでしまった人もおるでしょう。そのような思想の布教とか、思想の流れもあるんですよ。日本は幸いなことに、島国で大陸から受けてきた文明を、仏教も取り入れ、儒教も取り入れ、陽明学も取り入れ、朱子学も取り入れて、いろんなことを後から選択しながら文明を形成してきた。ところが、戦後の成功の中で失ったものは、やっぱり善なる価値を持った文明を忘れてしまうたんですよ。捨ててしまうたんやないかということなんです。

だから、これは精神教育とは言いませんけども、やっぱり道徳教育なり、公民教育などを家庭の中、それから学校の中に持ち込まなければ世代は復活できませんよ。社会を維持していく上では、やっぱり善なる価値観を子どもの時に植えつけるということです。ということだから、政策に結びつけてゆくような運動を起こしていただきたい。それから、社会学は余り感情に走らず、政策に走れ、こう言いたい。

B: 今日是非常に刺激的なお話ありがとうございました。

正直、自分自身、森さんの講演を聞いて非常に自分を見つめ直すみたいところがあったんですが、1つちょっと気になったのは、ちょっとこれ誤解を与えてしまうかも知れないんですが、「おまえ、おれの話ちゃんと聞いてんのか」と逆に怒られかねないかも知れないんですが、森さんの話を聞いて思ったのは、数年前名古屋で闇サイトで知り合った、全く見も知らぬ人たちが殺人を犯してしまった事件があって、それに対して被害者の遺族の母親が、メディアに訴えて「3人とも死刑にしてほしい」という報道があったと思うんです。森さんの話をすごく「なるほどな」と聞く反面、その事件をふっと思い出したんです。確かに森さんの話で「ノルウェーと日本は同じぐらいの確率論だ」と。「ああ、なるほど」と。「その捕まった人間たちの家庭環境というのも、もしかしたら僕も犯罪を犯すかもしれない。あるいは、誰でもが起こしかねない、でもちょっとたまたまそんな家庭環境の下で生まれた故に犯罪を犯してしまった、そういう普通の人たちなんですよ」と。確かにそうだと思うんです。でも、やはりあの報道を見て、僕はマスコミのからくりによられてるのかも知れないですけど、やはり何か腑に落ちないものがある。それは、やはり被害者の人にしてみれば、先ほどコメンテーターの鈴木さんもおっしゃったように、「なぜ私の娘が」という話ですね。

やはり社会学者はそういう、例えば児童虐待にしても、それからそういった犯罪の凶悪化ということについても、森さんと同じようなスタンスで、「いや実際はそんなに起こってません」みたいなことを言うんです。僕は社会学者ですから、「なるほどな」と、冷静な議論としてはそうだと、分かる。社会全体としては、やはりそういう議論は必要だと思う。でも、何か残ってしまう。森さんもちょっと先ほどの質疑の中で、「人情として分かるんだけど」とおっしゃっていた。これは、僕はある種、「良かれと思った」という正義の裏返し、何かそれでも残る怒りみたいなものがあると思うんです。この怒りみたいな



ものを、どういうふうには制御していったらいいんだろうかと。つまり、この怒り、9.11以降の我々の怒りというものをどのように飼い慣らしていったらいいんだろうか。このことを、森さんの立場からするとどうお考えなのかというのを伺いたします。

司会： 今の質問に対してむしろ聞きたいのは、被害者が厳罰化、さらには死刑を求めるのは必然でしょうか。そこのところが僕は大事だと思うから、一回聞いておきたい。被害者たちの姿たちを見て、その声を聞いたら、「被害者は必ず厳罰化を望んでいる。だから我々はその訴えに動かされる」という論理の展開になっていると思うので、そこのところが必然かどうかということで、森さんの答えも変わってくるし、その後の議論も変わると思うので、その点だけクリアにしてもらえますか。

B： 必然ではないと思うんです。例えば、光市なんかの母子殺害の遺族なんかは、すごくそれを冷静に。それもその冷静さというのが、「マスコミのからくりにはおまえ前煽られているんだ」って言われてしまうとそれまでかもしれないですけど、必然ではないとは思っています。でも、何かある意味、非常にあほみたいな言い方になってしまうんですけど、人情としての、こういうのは余り社会学者らしくない発言ですが、何か残るものがあるんです。だからと言って、僕自身が厳罰化すべきだという気は起こってないんですけど。でも、被害者には必ずもう厳罰化を求める人もいるだろうし、求めない人もいるだろうという風に見ています。ちょっとお答えになってるのかどうかわかりませんが。

森： まず、闇サイト事件について言えば、あの3人は顔で相当悪い印象を与えています。僕もかつてテレビ業界にいましたから、作り方はわかっています。一番凶暴そうに見える映像を使うわけですよ。もしあの中に4人いて、僕がその1人だったら、やっぱり相当凶暴そうな顔になっていますね。そういう意味でも彼らは損という言い方は変ですけどね、メディアにとってみれば使いやすい素材であったことは確かです。

ただ、死刑という制度が妥当かどうかは別にして、一審の裁判官の判決は、「ネットを使った殺人事件は社会的影響がとて大きい」と。だから厳罰に処すんだというのは、理屈はもっともだと思います。つまり、こういったネットを使えば、もっといろんな犯罪が起きる可能性がありますから、それに関して、今、強い姿勢で臨まなきゃいけないというのが、ある意味で死刑は別にして、それはもっともだなと思っています。

ちょっと話が変わりますが、僕がかつて『A』というオウム真理教のドキュメンタリー映画を撮りました。やっぱりこういった上映会があったときに、たまに「あなたの家族がもしサリン事件で死んでたら、あなたはこんな映画をつくれるんですか」という質問

をされます。僕は、それに対して、「つくるはずがない」と答えました。「家族がもしサリン事件で死んでいたら、僕はこんな映画つくる前に、麻原に個人的に復讐してるかもしれませんが」と言いました。結構、会場騒然となりました、その時はね。「ダブルスタンダードじゃないか」というやじが飛んだりしました。だから言い返しました。「ダブルスタンダードで当たり前じゃないか」って。だって、僕は今、非当事者です。でも、もし僕の家族がサリン事件で死んでいれば、僕は当事者になります。被害者遺族です。であれば、当然スタンダードは変わります。だから「ダブルで当たり前じゃないですか」と言ったんです。「非当事者だから僕は今映画を撮ったり、本を書いたりできるわけで、当事者になると、多分そんな気はなくなると思います」とそう言いました。

去年、『死刑』（朝日出版社、2008年）という本を書いて、やっぱりこういった場で「あなたの家族がもし通り魔に殺されたら、あなたはその人を死刑にするなど言えるのか」と質問をされました。『A』のときと同じように答えようかなと一瞬思ったんですけど、4年、5年経ってますから、多少進化しました。聞き返したんです、その人に。「自分の愛する人が殺されたというその状況を、あなたは本当に今頭の中にイメージ出来てるんですか」と。彼は「当たり前だ」と心外そうに言うんですけど、出来てるはずないです。自分の愛する人が、妻が、夫が、子供が、親が殺されて、この世界に今いないという状況を本当にリアルにイメージ出来ますか。出来るはずがない。出来たつもりになっているだけです。遺族の気持ちはそんな生易しいもんじゃない。御飯を食べながら、テレビ見ながら、掃除をしながらなれるような、そんなものではない。でも、メディアによって被害者の視点からの報道が何度も何度もすり込まれることで、そういう被害者の心中の表層的な部分、応報感情ですね。こればかりがすり込まれてしまう。その帰結として、今のこの世相というのがあると僕は思うんです。

それを踏まえた上で、彼に言いました。「僕はその状況をリアルに意識においては想起できない。出来ないけど、できるかぎりの想像をしながら言えば、僕の愛する家族がもしも殺されたら、僕はその加害を、死刑云々の前に僕が殺したいと思う」って。つまり『A』のときと答えは一緒ですね、その瞬間に僕は当事者になるわけですから。

ただし重要なことは、非当事者が当事者になる必要はないということ。そもそもなれないということ。「今、自分は日本人だけれど、もしアフガン人だったら」と思ってアメリカを憎む必要はないわけです。それは正当な感情ではない。フェイクです。今は日本人の感性でしか物事考えられない。だから非当事者である日本人として、アメリカのアフガン侵攻を考えねばならない。ならないとか、それしかできないんです。

でも、今のこの日本の状況というのは、非当事者が被害者。加害者でもないんですよ。被害者という当事者の意識を表層的に共有して、なおかつそれが全部共有したかのような

気分になってしまっているという、そういった状況で死刑存置を81.5%が主張するとか、そういった民意にあらわれていると思うんです。

「死刑は廃止したほうがいいと理屈では思うんだけど、自分の家族がもし殺されたらと思うと、死刑廃止って言えない」という人がすごいです。当たり前です。殺されたらそのときに意見を変えればいい。僕はそれでいいと思う。だから、心情的に割り切れないなんて当たり前なんです。それは、あくまで今、「自分は非当事者なんだから」、もしくは「社会学者なんだから」、もしくは「映画監督なんだから」という、こういう意味で別に無理やり考える必要もない。自然に湧いてくるものはあるはずですから、それをそのまま述語にすればいいんじゃないかと思っています。

C: 今、怒りとか憎しみという話がテーマになっているかと思います。よく言われるのは、他者と向き合ったときに、誰でもいいんですけど、ヘイト・コントロールということがよく言われるんですね。もう人が人を嫌いになったり、憎しみを持てしまったり、違いを受け入れずに排除しようとしちゃうのは仕方がないから、それをある程度、それこそ社会性を担保にして一緒に生きていくためにコントロールしようという話が、多文化社会論とかではあるわけなんですけれども。今日の森さんのお話を伺っていて、むしろコントロールしなきゃいけないものがあるとしたら、それは善意である。善意というのをバツと出すんじゃなくて、善意を持ってしまうのは仕方がないから、それを場面々々でどういうふうコントロールしていくかを考えなければいけないということなのかなと受け取ったんですが。

もしそれが正しければ正しい、間違いというのなら間違っていると。もし僕の解釈が間違っているとすれば、森さんが善意という言葉で、研究なりをどういうふうにしていこうということを提案なされたいのかを伺いたいと思っています。

森: まずは、僕は社会学者でもないですし、もちろん政治家ではないですし、社会改革家でもないですから、社会をどうしよう、こうしようと思えてないですね。僕は、だから現状こんながあったよという、それを見せたり、面白おかしくしたり、それが自分の領域じゃないかと思ってるんです。もちろんそういうことしながらも、いろいろ考えたりはしますけれど。

ヘイトであり、あるいはフォビアであり、まさしくおっしやるとおりだと、僕は思います。つまり、ヘイトとフォビアには理由があるわけですよ。単に目の色が違うからとか、肌の色が違うからってヘイトが生まれるはずはないわけで、なぜそれがヘイトにつながってしまったかということに、何かきっかけがあるわけですよ。そのきっかけが差別化であり、他者化であり、それがいずれ危険視してしまう。つまり自分にとっての害悪なる存在なん

だという認識が生まれることで、ヘイトなり、もしくはフォビアが生まれると思うんですね。ということは、それはやっぱり今日僕が言ったような、つまり根底にあるのは善意なんです。身を守りたい、もしくは自分の愛する者を守りたいとそういった意識から発動しているわけですから、そのヘイト、フォビアの根源を見つめれば結局は自分の内側に返ってくる。そういう自分の内側で良かれと思う気持ちという部分があるからこそ、この他者を峻別したり、もしくは他者化したりという、絶対他者化したいという気持ちにつながると思うので、それはむしろだから、そのヘイト、フォビアそのものよりむしろ自分の内側の方に、自然に視点がいくと思うんですけどね。そちら側を見た方がいいんじゃないかなという気はします。

D： 今日、貴重なお話をありがとうございました。

余り自分の大学を悪口を言うのはあれなんですけど、うちではさっきのたばこの話で、去年、森さんに来ていただいて講演はしていただいたんですけども、今年から龍谷大学の滋賀のキャンパスの方だけ禁煙キャンペーンみたいなものが始まりまして、あくまで「うちのキャンパスは禁煙を推進しますよ」みたいな定義で言ってたんですけども、ベンチに備えつけられた灰皿が全部撤去されたり、便所に吸い殻がたくさん積もって、「あれ、環境悪くなっているじゃないか」と思ってたら、警備員の方がたばこを吸ってる学生を捕まえて、いろいろ指導するみたいなことになるんですね。「あれ、警備員ってそもそも学校外部の人たちから学生を守るための人なんじゃないのかな」と思った瞬間に、「ああ、何かこれが見えない敵の正体か」って、わけの分かんないけど考えたりはしたんですけども。

森： 素晴らしいですね。

D： そこなんですよね。うちの後輩の女の子がそれまでは「たばこを吸う人たちに何も感じなかった」って、言ってみればキャンパスでたばこを吸ってる人がいても、「同じ龍大生だな」みたいな感じで、同族感情を持ってたんですけど、ある日そのキャンペーンが始まった瞬間に、たばこを吸ってる奴らが何かすごく憎々しく思えてきたみたいな話になって、ああ、これはまさに森さんの「禁煙をした瞬間にたばこを吸ってるやつが憎い」みたいな話なんですけど。要は、その排除を線引きした瞬間というのがあって、それが恐らく原口さんや鈴木さんの言ったような排除の現場という、これは環境というものとすごいかかわってくると思うんですけども。

この排除の現場を映すというところが、例えば森さんがノルウェーの刑務所の現場を映すということで、かなり学生たちの目にも広がりが出てきたりという状況があったと思

うんですけども。「ああ、そうか、うちのキャンパス環境というのは、そのノルウェーの刑務所以下だったのか」というくらいになったりして、多少世界が見えるんじゃないかと思ってたんですけども。その森さんの映像作品もBSハイビジョンで300人ぐらいしか見えないという状況になったりすると、はたして今後のテレビの状況というのをどうお考えになっているかということをお聞きしたいんですけども。

僕は、ネットというのは基本的にテレビを脱構築はしたけど、テレビの役割を肩代わりしてるわけじゃないと思ってるんで、今後地デジとかが始まって、僕のテレビはいまだに右上の方にアナログと書いたテレビなんですけども、テレビの、マスメディアの状況は一体どう変わってくるのかという、その予想をちょっと森さんと鈴木さんと原口さんの三者に、それぞれ御意見を伺いたいなと思うんですけども。

森： 多分、僕がやっぱり一番テレビに近いところにいたし、現在もいますから一番近視眼的なんでね。もちろん、鈴木さんが一番これについて明確に解説してくれるんじゃないかという気がするんで。一応言いますけど。とにかくテレビには明るい未来はないと思ってます。今、現在もう相当数の大学生はテレビ離れしてますよね。今年の秋特番、9月末から10月頭に掛けてのゴールデンタイム、もう見られたもんじゃないでしょう。もう恥ずかしいぐらいです、見ていると。やっぱりこうなっちゃったなあと思う。でも、結局あれはある意味コモディティズムですよ。どれが一番視聴率が取れるかとやっていった結果、あれになっちゃったわけね。それを言いかえれば、この辺にニートという言葉を使いたくもないけど、この国はいつからこうなっちゃったのかと思うけれども、逆に言えば、もうある程度の良識もなくなっちゃってるんで、だからこそこういった番組ばかりが多くなってるのかもしれない。とても末期的ですよ。

だから、少なくとも5年、10年のスパンではないでしょうけど、10年20年のスパンで考えたら、やっぱりネットには融合される。その場合の主体はネットの方で、テレビは多分副次的な存在になるでしょうね。そういう意味では、もうテレビ業界というのも我が世



の春だと思っていたのも、先はない業界であると。ただ、やっぱり当然、映像メディアの恐ろしさも当然あるわけで、プロパガンダの強さであつたりとか、それがやっぱりネットという、これはもう世界同時多発的なメディアですからね。

最近で言ったら、スーザン・ボイルというイギリスで一世を風靡したオーディション番組で出現した女性歌手、あれやらせですからね、完全に番組のね。それを知らずにNHKの7時のニュースで感動物語として紹介している。ということは、テレビの人間はやらせに気づいてないのかという、ほんとにショックだったんだけど。そのレベルでやっているテレビがネットに融合されたら、ネットというのは部分的にもう世界的に氾濫するわけですから、もうリテラシーができなくなってしまう。とても恐ろしい状況になるような気はしますね。ただ、とても悲観的ではありません。

鈴木： まず1つ押さえておきたいのは「テレビかネットか」という対立は単に不毛なんですね。つまり、どういうことかと言うと、20世紀になってラジオというメディアが出てきて、その前は印刷メディアだったけど、それがラジオに取って代わられて、ラジオがプロパガンダの道具になった。戦後はより強力な洗脳効果を持つテレビというものが消費社会の訪れとともにやってきたので、戦意高揚ではなくて、消費意欲高揚のためにテレビが使われるようになって、特にアメリカと日本を中心にテレビCMの文化というものが生まれて、という流れで、メディアの主役というモノは変遷してきたけども、それで紙メディアがなくなったかという、そんなことはない。ラジオも無くなってない。ということは、テレビがどれだけネットをよく見ている人から憎々しく見えていようと、おそらくテレビという媒体が無くなることはない。いくつかのテレビ局が無くなることはあるかもしれないけど、テレビという媒体が無くなることはないというのが1つ。

2点目。しかしま、どうしてもネットではテレビの評判がもの凄く悪いですね。「マスゴミ」なんていう言い方で、自分たちに都合のいいことしか報道していないとか、嘘ばかり放送しているなんて書かれている。じゃあ、あらゆるマスメディアが偏向報道をしていて、あるいは低俗なことをやっているかという、そんなことはなくて、テレビ以外にも、論壇誌や経済誌があるし、あるいは紙媒体だけじゃなくて、テレビに出てるタレントでも、ラジオだと本音を言えたりとかということもある。

いま調査してる真っ最中なんですけど、どうもネットで言ってることが真実で、例えば「民主党に政権が渡ったら、外国人が日本にやってきて日本は終わるんだ」とかってまじめに信じてるやつって、もしかするとマスメディアの中ではテレビしか見てないやつかもしれないという疑惑がちょっとあります。手元にあるデータだと相関が出てないので分からないんだけど、ちょっと印象としてはそういうところがありますね。

だから「テレビかネットか」という対立を煽り過ぎるのはあんまり良くないんだけど、なぜそれが起きてるかと言うと、これまでの日本では「メディアの交代」が、世代交代を可能にしてきたからですよ。よく「世代交代が必要だ」と言うんだけど、同じ領域での世代交代なんて起きたことないですよ。つまり、これまで舞台に出てた人がテレビに出るようになって、でもテレビに完全に特化したテレビタレントというのが出てくるようになると、舞台からやってきた司会者なんてというのは、そこから撤退していくということが起こる。つまり、新しいメディアが出でこないと世代が変わらなかったんで、どうしても世代交代とメディア交代が結びつけられがちなのではないかと思います。でも、その構造に飲み込まれて、まさに「あいつが敵だ」と名指してしまっていること自体が「何かに踊らされているんじゃないか」と疑ってかかるべきだろうというのが2点目。

3点目。じゃあなぜ「マスゴミ」と批判されるような、偏向した報道や、横柄な取材が発生してしまうのか。自分の実体験で話すと、今年の春からNHKでレギュラーの番組を持っているので、結構頻繁にロケに行きます。そうするとロケ車に乗って現場に行くんですけど、オープンカフェの、思いっきりど真ん前にロケ車止めちゃうんですね。店の人が出てきてもすごい怒ってるんだけど、そりゃそうですね。あるいは、人の家の玄関をふさいで止めたりとかするわけですよ。雨降ってるんで、ロケ車のドアをスタッフが開けて、傘を出して「じゃあ鈴木さんちょっと屋根のあるところまで、申しわけないです」と。「ちょっとそういうマジでやめてもらえますか」って言いたくなるんだけど(苦笑)。何でそういうことが起きるんだろうと思った時に、最近になって状況が改善されてきて分かったのは、そういう人たちって、実はフリーのディレクターさんたちなんですよ。つまり、彼らはNHKから仕事をもらった非正規雇用労働者なので、自分の仕事を納品する局の人に認められないと、次の仕事がないわけだ。そうすると、テレビ的にもおもしろいコメントを撮ってきて、あるいは最近だと唐沢なきさんがNHKの取材にぶち切れたという事件があったけれども、ああいう形で絵になるコメントを撮ってきて、クライアントであるNHKの人に気に入られなきゃ、局の人に気に入られなきゃ、という話になってしまう。だから、取材対象や、ロケ車を止めた店先は単なる「素材」や「場所」でしかない、そういう扱いをするようになるんだろうなと。

ここにもさっきの「排除するやつも実は排除されている」という問題があるんです。マスゴミの権力性みたいなものを僕らは目の当たりにして、「NHKなんてマスゴミだ」と思ってるかもしれないけど、実はそこには、別にマスゴミの中ですら非対照の権力性というのがあって、その中で構造的にある行動パターンを取らなきゃいけない人たちがいるというのが不可視化されてしまう。つまり、ある種の敵を名指した瞬間に、別の敵が見えなくなってしまうということが起きる。そういうことを考えると、テレビの将来について考えるの

は結構だし、「マジ、テレビつままない」とかというのはすごく結構なんだけれども、実際に現場に入ってみるといことで、何か見えてくることはあるでしょう。もしその部分に興味があるのであれば、自分で何か体験をしてみるという、撮られてみるとか、撮ってみるとか。ビデオドキュメンタリーなんかおもしろいんじゃないのかなという気がします。

原口： 僕は、テレビ等のマスメディアに関しては、個人的な体験として、その影響力の大きさを肌身に感じるがあります。2000年からずっと貧困や野宿の研究をしてるんですけど、2004年ぐらいから潮目ががらっと変わりました。多分きっかけは、「フリーター漂流」であるとか、「ワーキング・プア」であるとか、「ネットカフェ難民」であるとか、そういったドキュメンタリーの影響ですね。いまや本屋では、貧困関連の本が棚にずらりですよ。そのぐらい貧困に注目が集まるようになった。あるいは去年の年越し派遣村。派遣村はメディア戦略をかなり巧妙に組み立ててやった運動だと思うんですけど、あーいった形でマスメディアに取り上げられるというのは、例えば2000年時点では考えられないことだったと思います。ようやくマスメディアが現実を追いついたという感慨がある一方、ただ、同時にあんまり期待してもだめだろうと思っていて、この風潮はある意味では「貧困ブーム」みたいなところがあって、ブームである以上、ある程度の波が過ぎたら忘れ去られてしまう可能性があり、引くときには一気に引くだろうなと警戒していています。テレビというメディアの影響力の大きさと、その危険性の両方を感知しているところなんです。

それから、ドキュメンタリーということで、この間思うところもあります。僕はずっとテレビっ子だったので、映像や表現というものは与えてもらうものが当たり前、という身体になっちゃったんですよね。でも、最近いろいろなドキュメンタリストですとか、あるいはメディア・アクティビストなんかと接していくうちにはっと気づかされます。映像や表現はつくるものなんだな、と。その視点が僕の中で今まで抜けてたんですね。メディアというのはつくっていくものなんだ、ということに気づいた途端に、そこにはさまざまな可能性があることがみえてくるんですね。もちろん僕にできることは限られていますが、メディアをつくることに長けた人がたくさんいることですし、そういった人々といい意味での役割分担して、連携していったら、もっとおもしろいことがたくさんできるんじゃないかと思っています。自分たちで何かをつくっていく、というところにもうちょっと注目をして、やっていきたいなと、個人的には思っているんです。

それに関連して、ご質問にあった「社会学者はもっと政策を語るべきではないか」という言葉には、「そうだな」と思うところがありました。ただ、やはりここでも連携と役割分担が重要だと思うんです。僕は恐らく政策は語れません。そこまで頭は良くないので。



知識もないし。でも、現場の声に耳を傾けて問いをたてることならできる。一方では、僕の身近な友人のなかでも、政策をつくるのに長けた人というのは確実に存在しています。とするならば、研究者として、社会学者として、あるいは地理学者として、得意分野はそれぞれありますから、そういう人たちといかに連携していくのか、ということが重要になってくると思うんです。僕には僕のできることがある。政策をつくる、設計するのが非常に得意な人もいます。おたがいに情報を共有したり、議論したりして、交流や連携を培っていくことが重要だと思います。そう思ったときに、これは必ずしも研究の分野に限った話ではありませんが、やっかいな障壁は「対案主義」というやつですね。つまり、対案を出せないのであれば口を挟むな、って空気が、国内外で広まりつつあるような気がしています。そういった空気は、研究者同士を、あるいは研究者とアクティビストを、研究者とドキュメンタリストを分断させてしまう。そういった罫が、至るところに仕掛けられていて、これには僕らはよくよく注意しなければならない。とにかく僕らに必要なのは協力。1人では世の趨勢にとうてい太刀打ちできませんから。そういった連帯、連帯という言葉がちょっとハードであるならば、信頼関係、これをいかに、どういうふうにつくっていけるのかということが、今後の動向を左右するキーポイントになってくるんじゃないかなと思います。

司会：ところでガードマンが学生を守るというのは当たり前ですか？今、確かに君たちが置かれてる状況は極めて同情するし、憤りも感じるんだけど。ふと違和感を持ったのは、「あれ、ガードマンは僕たちを守ってくれるはずなのに」という、そこに僕は、違和感がある。ガードマンが守っているのは、私立大学であれば、学校の財産であるから、学生がそれを壊せばそれは当然差止めようとするし、そういう輩は追い出すというので、君を責める

つもりではなくて、そここのところに、やっぱりガードマンは守ってくれると思ってしまう。今の多くの我々は、今日の話で言うと、何を恐れているのかなということを感じました。時間がもうオーバーしていますが、どうしてもという方が手を挙げていたので、どうぞ。

E: 森さんを中心にマスメディアについてちょっとお聞きしたいんですけども、当初、この「見えない敵」という言葉を受けたときに思ったのが、村上春樹氏のエルサレムスピーチの授賞式で出てた言葉で、「壁と卵」で、あそこで言ったのが、壁と卵があって、卵は壁にぶつかって割れる、その時僕は常に卵の側に立つ。壁には名前があります、壁とはシステムのことです。システムは戦争を生みます。その後にもいろいろ言ってたんですが、そのシステムという言葉についてちょっと思うことがあって、僕がゼミで中心に学んでいるのが、ボードリヤールという消費社会論者です。そこでゼミの先生が主張されているのが、経済至上主義が日本では支配的であると。先ほどの話でも、テレビ局が今、予算削減するのは、経済至上主義というシステムの中で予算を削減して、結局メディア側も必死でそうした行動を取らざるを得ないような状況もあって、その中で自分の利益だけを得るために社会性が欠落してきているという話もあったんですけども、あと警備会社などもすべて警察の天下りであるために、マスメディアが戦後殺人事件数、2007年が最低だということを発表しない。それはやっぱり経済社会の中で発表することで損を受ける人の反発などがあって発表してない。そういう現実がある。マスメディアがすごく批判されているとしても、やっぱり知ることを担保しているマスメディアも絶対必要だとも思うんです。その中で、新聞というのは信頼性もありますし、テレビのように大損したりする危険性も少ない。新聞社の主体的な考え方があると考えているんです。その中でマスメディアが今後報道を行う時に、加害者の動機の詳細にまで踏み込んだ報道を行うことが、問題の解決を行う上で必要ではないかと思ったんです。マスメディアの存在そのものがもう大きくなり過ぎて、そのことの問題を感じられているのか。それについてお伺い出来ればと思います。

森: まず、ちょっと僕の聞き違いかもしれないけど、警察庁がこれを積極的にアナウンスしない理由は天下り云々が若干あるにしても、メディアはそれに関係ないです。別にメディアの人が警備会社に気を遣っているわけじゃなくて、警察が、要するにニューヨークのように、「そんなに治安悪くありません」ということを積極的に言わない理由は、警察庁のホームページに10回ぐらいクリックするとやっと進んだというか、統計図が出てくる。でも、本当はもっともう一番フロントページに出していいぐらいだったのに出せなかったということで、やっぱりそういったような部分があるんじゃないかなという憶測で話を

しました……。

動機の説明云々ですよ。確かに、今、被害者偏重というのが現状あるわけだけれど、動機の説明をここでやったところで何か得られるかと言うと、それもちょっとまた難しいんじゃないかという気がしてます。さらに無罪推定原則というのが本来あるわけですよ。大学の韓国や中国からの留学生に、「日本に来て、メディアを見て一番びっくりしたこと何ですか」と聞いたら、「容疑者の顔や名前がテレビに出てたことにびっくりしました」との答えがよく返ってきます。韓国は結構日本と気質は似てるから、無罪推定原則は守られてないんじゃないかと思っていたので、ちょっと驚きました。ちゃんと守られてたんです。だから、もちろんヨーロッパもそうですけどね。容疑者は顔と名前を出さない、なぜなら容疑者だからというので。裁判で白黒ついてからちゃんと報告するという、とても当たり前前のことで、やっぱり日本でそれが守られてないわけですよ。容疑者になったら、犯人であるかのような報道が普通になされてしまっている。そういう意味で、商業主義にどんどんはまり込んでいった結果なんですよ。でも、それに対抗する形で、もちろん加害者というのは、どういう人間かということを知らせるようなことは大事なことなだけけれど、でも、多分それは今の既成のマスメディアの人にやらせちゃうと、また何か違う方向に行っちゃいそうな気がして、微妙な気がします。ちょっと僕はそれについては、今「これがいいんじゃないか」というきちんとした対案がないけれど。でも加害者の動機説明だけだと、いかんせん違うんじゃないかという感じぐらいです。

最後の質問、何かメディアが大きくなり過ぎたのではないか。これしようがないですよ。そういう存在なんだし。だから水や空気は汚くなったりすると、これはどうするかという、どうやったら水や空気を浄化できるかって考えるわけでしょう。もうメディアも同じで、もう今はメディアのない生活はあり得ないですから。一旦手にした以上、人類はもうメディアを絶対に手放せないですから。であれば、どうやったらメディアをもう少し正常化できるかということを考えるべきで、メディアを無くすことはできないし、パイを少なくすることも無理ですからね。ある意味で健全なんですよ。市場原理に走るということは。だから、そこにどうブレーキを掛けるかというところで、幾つか細かなポイントがあるけど、大きくは、やっぱりもう大きく言っちゃうと、僕らが変わるしかないということなんですよ。僕らが変われば、あっという間に変わりますからね、全部ね。ただ、僕らが変わるためにはメディアが変わらなきゃいけないという、常に鶏と卵になっちゃうんだけれど。

でも、もしかしたら、こういう形で、今日のシンポジウムもそうですけどね、ある意味、今ネットがありますから、ブログがあるわけでしょう。あるいは僕の本を読んでくれる方もいるかもわからないし、『A』か『A2』を見てくれる方も3人ぐらいこの中でのいる

かもしれないし。そういうところを考えれば、その中でちょっとずつ広がっていけば、多少はカウンターになるんじゃないかなと。今、そこに希望を持つしかないかなと僕は思っています。

鈴木： 用意してきたんだけど、使わないまま終わりそうだった話が出来そうなのでしていいですか。

何をしたらいいかという具体的な話につながる話をしようと思って、今日2つの本を持ってきたんですよ。1つは、敵という話があったので持ってきたのが、茨木のり子の「敵について」という詩。これは1950年代に書かれた詩なんだけど、最近、『亡念のザムド』というアニメでよく引用されてます。聞いたことない人もいるかもしれないけども。

この詩は、敵を巡る二人のやりとりの詩なんです。 「私の敵はどこにいるの」という一方の人の問いかけから始まって、「これが敵です」と名指してもらおうと、すごい答えが爽やかで明快で気持ちがいいと。それに対してもう片方の人が、だけど敵というのは、昔のように鎧兜で一気に躍り出てくるものじゃない。「現代では計算尺や高等数学やデータを駆使して算出されるものなのです」と返す。それに対して「でもなんだかその敵は私をふるいたたせない」という話をするわけです。

この詩では最後に何を言ってるかという、「私は待っているの 私の敵を」と。「私の爪も歯も耳も手足も髪も逆立って／敵！と叫ぶことのできる／わたしの敵！と叫ぶことのできる／ひとつの出会いがきっと ある」と言っていて、つまり見えない敵に対して、見える敵というのが出てくると、ある種、生の充実感みたいなものが、そこに出てくると。

その関係性みたいなものというのを更に解説するのに持ってきたのが、吉本隆明の『マチウ書試論』（講談社、1990年）。マチウ書というのはマタイの福音書のことなんだけれども、そこでこういうことを言ってるんです。

現代のキリスト教は、貧民と疎外者にたいし、われわれは諸君に同情をよせ、救済を



ころごし、且つそれを実践している。われわれは諸君の味方であると称することは自由である。何となれば、かれらは自由な意志によってそれを撰択することが出来るから。しかしかれらの意志にかかわらず、現実における関係の絶対性のなかで、かれらが秩序の擁護者であり、貧民と疎外者の敵に荷担していることを、どうすることもできない。荷担の意味は、関係の絶対性のなかで、人間の心情から自由に離れ、総体のメカニズムのなかに移されてしまう。

この2つの文章をちょっと意識しながらとるとどうということになるかと言うと、つまり明確にある種の敵対関係に至るところまで関係性をむすんだときに、両者の関係性を分かっている関係の全体性ないしメカニズム、あるいは「システム」の存在に、人は初めて気づくことができるということだと思えます。

具体的な話をすると、僕、『青春リアル』というドキュメンタリーの番組をやっていて、の中でちょっとおもしろいことが起こっている。つまり、外のスタッフを減らして内製化を進めたら、すごく番組の出来が良くなってきたんですね。何でだろうって考えると、若者を対象にしたドキュメンタリーなので、出演者にも普通の若者がいっぱい出てくるんだけど、彼らのとくにディレクターがひとりで2週間張りついて、カメラを回しながら、「あなた、でもそれで納得してるというけれども、本当に納得してるの？」みたいなことを問いかけたり、あるいは軽く言い合いをしたりみたいなことの中で、撮られる側が撮る側と関係性を結んでいく。そうする中で、初めて撮られる側の考えや悩みがクリアになってくるんです。多分、客観的な報道を志すドキュメンタリーの撮り方としては反則だし、アウトです。けど、マスメディアに撮られている側の、その外には、それを撮っている人間がいて、その撮る－撮られるの関係は、システムが作っている。そのことを意識したときに、撮る側も、撮られる側も、意識がはっきり変わってくるんですね。

僕がなぜこのことを強調するかというと、2000年代の日本というのは、まさに「システム」さえ何とかすれば問題は解決するってみんなで思っちゃったからですよ。そのシステム、つまり、官僚を何とかすれば、郵政を民営化すれば、今だったら既得権の世代を追い出せばという形で、「システム」が、自分から遠いところにいる「敵」という風に定められてしまった。茨木のり子の詩で言えば、「算出される」敵を、自分を奮い立たせる存在と取り違えちゃったんだと思えます。

けれど、あの詩で言われていた「敵」というのは、この出来事は自分には関係ない、だから自分は純粋な被害者で、敵がすべて悪いんだ、とか、そういうものじゃないと思うんですね。むしろ吉本の言う「関係の絶対性」に近いもの、どうしても敵対させられてしまう、具体的な個人のことなんだと思えます。だから、何かもし記者として何か現場に入っ

ていきたいと思うのであれば、期待したいのはそういう関係性を取り持つ中で、でも記者でしかあり得ない自分に気づいて、それでも関われるかどうかということだと思う。

F: イラク戦争が起きたときに、その後で邦人の人質問題が起きましたよね。あのときに、非常に人質の方に対してすごいバッシングとか起きたんですけど、あの時は日本社会の一つの縮図みたいな形なのかなと自分では思ったんですけど。結局は、人質に対するバッシングみたいなのがどうして起きてしまったのでしょうかというのを、特に鈴木さんからお聞きしたいんですけど。

鈴木: 何で起きたのかと言われれば、つまりなぜああいうタイプのことが起きるのかという話と、具体的にバッシングがなぜ起きたのかという問題とをちょっと分けて考えないといけなくて。具体的に何で起きたのかって言ったら、当時の報道の問題がまず1つある。つまり、小泉首相がどういうふうに見会ったか、それをメディアがどうクローズアップしたか、そしてそれに対してネットがどう反応したかという複合連鎖の中でいろんな情報がつくられていたり、無視されていたりしたという経緯はありました。

僕はあの中でバッシングされてた今井さんにも会って話したことがあるんですが、だから、彼からするとなぜ自分たちが叩かれているのか分からないんですよ。帰ってみたらなぜか猛烈なバッシングに遭っていて、それはもう自分たちが帰る前から出来上がっていたので。彼らの行動がどうだったかということよりも、人質報道やその周辺情報を人々がどう把握したかということの方が要因としては大きかったろうと僕は思ってます。

あんなタイプのバッシングみたいなことが、戦争が生み出す社会みたいなものと絡めて考えた時にどうかと言うと、おそらく世論の流れとして、2001年小泉訪朝、2002年ワールドカップという流れの中で、日本が東アジアに対して置かれている位置というのが微妙になってきたことが、マクロな要因としてはあります。具体的には、世界で唯一冷戦が終わってない朝鮮半島と台湾海峡というところが日本の目の前にあるということが、誰の目にも意識されるようになってきた中で、「日米安保条約どうしたらいいんだろう」とか、「基地どうしたらいいんだろう」ということを考えなきゃいけないようになってきたタイミングで、国際的な活動なり、戦争へのかかわり方なりということを考えなきゃいけない状況が生まれていたし、現在もおそらくそれは続いている。

だから、バッシングされたから問題にしがちだけど、もしかすると国際的な平和活動とか、あるいは貧困国を救うための活動をしてすごく褒められている人とかも、全く同じ構造で褒められている可能性があるんです。それこそさっき言ったシステムの話、つまり僕たちが置かれている状況と比較しながら、なぜある人がバッシングされて、別の人は褒め

られているのかということをおそらく考えないといけない状況にあるんだろうなど。だから、結構、2000年代の日本の置かれた状況というのは、「戦争が生み出す社会」というふうに関今日言ってきた中で、個別の、独特の位置を持っているというところがあるということではないかと。

C: 済みません。時間がないと思って分かったふりというか、納得するふりをしたんですけど、そしたら、全然納得出来なくて。ちょっと話を戻させていただいて、善意をどうコントロールするかという話なんですけどね。やっぱり当たり前のことなだけで想像力という問題、つまりイマジネーション、クリエイティビティじゃなくてイマジネーションという問題もあって、今やマスメディアが無いと我々イマジネーションをちゃんと管理出来る状態ではない。それは否定出来ないと思うんです、仕方がない。じゃあ、この腐りきったマスメディアの世界の中でイマジネーション、想像力が弱くなって、じゃあどうすりゃいいんだろうということだと思っうんですよ、非常に大ざっぱな感じですけど。

そこで、先の僕の質問の後で出てきた流れが非常に理想的な状況だったので言うんですけども。実はイマジネーションを喚起しているようで最も抑圧している発想は、「代替案を出せ」、「モデルをつくれ」と。「批判するだけでなくて回答を出せ、答えを出せ、モデルをつくれ」。それは一定の想像力を働かせて「こういうパターンがあって、こういう結果が導かれるからこうしたらどうですか」ということを言わせてるように見えながら、実は1つの答えの方向に向かって、ちゃんと結果を出せという、答えを出せということで、ある種の強迫力みたいなものがあると思うんです。それに対しては、徹底的に抗わなければいけないと思うわけなんですけれども、別に僕はもちろん予期しているわけでも何でもなくて、先ほど前列の方で質問なされた君は龍大の学生だったかな、たばこの警備員の話。

D: はい。

C: だったらそういう場で、阿部さんが言ったように、警備員というのは学生を守るものだと思っうるか思っうないかともかく、そういう警備員のおっちゃんがいたら、「警備



員のおっちゃん、僕らを守って、たばこを注意するんじゃなくて、僕らを、この抑圧的な体制から守ってくれ」と、その場で言わなきゃだめなんですよ、直接。言える場は、限られた中である、メディアが介在しない現場に居合わせたら、その場で直接的に「おっちゃん、俺らを守れ」、「排除するな、守るのがあなたの仕事だ」と直接言わなきゃだめですね。場面というか、言うチャンスって結構あると思うんです。そういうチャンスを感じて逃さずやっていくぐらいのことからしか、出来ないかなというふうに思いました。はい、どうも済みません。

司会： もう時間もないですから、最後にお三方これを言うておきたいとか、言い残したことがあるというのがあれば、どうぞ。今の質疑応答への感想なりコメントでもいいので。

森： 今日一部だけ上映しましたが、BS1 で今月下旬に短縮版ですけど、放送されますので、もしBS のチャンネル持ってらっしゃったら、僕持ってないんですけどね。この番組ぜひ見てください。以上です。

司会： どういうタイトルの番組ですか。

森： 『未来への提言』です。

それでも一つ言えば、今日見て、皆さん気づかれたと思うけど、ボイスオーバーという、つまり吹き替え処理をしていました。考えてください。多分、十数年前であれば、こういう番組で吹き替えはあり得ないですよ。字幕テロップですね。今はNHK スペシャルもみんな海外物は吹き替えにしちゃっています。つまり、元の声が消してしまってる。でも、声ってとても大事な情報です。どこで彼らが言葉に行き詰まったかとか、どもったかとか、勢いついたか、大事な要素です。その情報をいとも簡単にこうやって消してしまう、それは分かりやすさを視聴者が求めるからです。その結果こうなってしまって、だから言ってみれば顔を隠してるようなもんですよ。この番組は、僕がインタビューした回の前の前くらいがチョムスキーなんです。チョムスキーもどうも吹き替えしてるみたいで、それチョムスキーが知ったら怒るだろうと思うんだけど、怒ったかどうか聞いてませんけどね。これはやっぱりNHK のディレクターは僕がそう言ったら、さすがに「うん、私もそう思う」って言って、上にかけてくれたけど、やっぱりどうしても覆らなかつた。やっぱり今のメディア、本当にそうになってしまってるので、その辺も含めてちょっと見ていただければと思います。

鈴木: さっきとの関係で全体性的の話だけど、要するに僕が「見えない敵への恐れと排除」と聞いたときに、最初に想起したのは、見えない敵を「見える」化して「そいつを叩けばいいや」という発想には絶対しない方がいいということなんです。さっきの「その場で警備員に言え」って話じゃないけど、何か問題が起こるとすぐシステム側に文句を言って、「何とかして下さい」みたいな感じで言う、つまり当事者性を回避しながら敵を作っていく構造がおそらくあって、それが「郵政何とかしろ」とか、「既得権何とかしろ」とか、「官僚を何とかしろ」とかというような言説を生んできたし、現在の排除も生んでいる。

そう考えると、多分、僕らにはむしろ「敵」と向き合うことがすごく求められているし、敵と向き合わないことというのが最も罪深い。敵対しないことが最も厳しい状況を生んでいるのだと思う。だから、嫌な人がいたら、むしろ敵対をした方がいいと思うし、その結果もう決裂しても全然いいと思うべきではないでしょうか。敵対しない中で、「システム」にうまく丸く収めてもらおうということをやっている限り、「システムを味方につけよう競争」ばかりが跋扈してしまう。そうすると、「いかにディレクターとかプロデューサーに気に入る絵が撮れるか」みたいなことしか考えられなくなるので、見えない敵を簡単に「見える」化しないようにしたいなど。そういうことをちょっと考えていました。

原口: 最後に何を言おうかなと思いながら考えていたんですが、ひとつ単純なことを。みんなが、僕が、人々がもっとしゃべり出したら、語り出したら、世の中ももっとおもしろくなるだろうし、そこからいろいろな展開が望めます。たしかに、このご時世、一寸先は闇です。しかし逆に言うと、一寸先何が起こるか分からない、偶然性に満ちた豊かな世界であるともいえます。偶然性の世界で、何がおこるか本当に分からない世界の中で何かを主張し、やっていくことというのは、結構楽しいということを再確認したい。なにをしゃべりだし、主張するかはひとそれぞれですが、声が多様であればあるほどまちががなく世界は楽しく豊かなものになる。それに関連して、さきほど「警備員に言わなきゃだめだよ」という話がありましたけども、自分が思う自分の主張をきちんと声に出し「伝える」というのは、単純なようで結構難しいですね。それなりのトレーニングというか、身体訓練、ワークショップ的な要素は必要になると思うんです。と同時に、「聞く」という態度も重要で、これまた単純でありながら難しい。難しいのだけれども、確固とした正解やモデルが見当たるわけではない、この偶然に満ち溢れた世界の豊かさを引き出すためには、「聞く」「伝える」という基本的な実践こそ大切だと思うのです。そのあたりから、研究者の役割、あるいはそれはひょっとしたらドキュメンタリストの役割かもしれない、あるいは広い意味でのアートの役割かもしれないのですが、それぞれの役割を見出していかれたらと思っています。

司会： 私の方からは最後に、研究所が今後も活動を続けていく上で、今日はすごくたくさんの方のヒントが得られたと思います。

それは簡単にまとめれば、キーワードとしては「排除」、これは英語で言うと、エクスクルージョン (exclusion) ですよね。と同時に、原口さんの方から出された「ソーシャルインクルージョン (social inclusion) は大事なんだけど、そこにちょっと危うさを感じる」ということを踏まえて言うと、鈴木さんはこのエクスクルージョンにすらならないような、敵対すらしないようなところで「敵対する」ことが大事だと指摘された。原口さんは、インクルージョンだけを見ていくと、実はそこに恐ろしいことが起こってくると言われた。森さんが言われたように善意に基づいて、物事が行われていくときに、それが結果として排除になったり、それこそ暴力になるといったときに、今後研究所のテーマで考えていきたいのは、ではインクルージョンでもエクスクルージョンでもないような状態というのがもしあるとすれば、どんなものなのだろうか。僕はあると思うんです。きょうのお三方の話聞いていて、そのイメージをすごく感じたので、そういうものがあるとしたら、今度は逆に、どうして今私たちがインクルージョンかエクスクルージョンでしか考えられないのかというヒントは、そのときの「ソーシャル」にあると思うんですね。今日は、それは鈴木さんの方から「社会人とは何か」とか、「社会で立派になるとは何か」と言ったときに、その「社会」に我々は取りつかれちゃっているから、インクルージョン、つまり内側に取り込んで仲間にするか、エクスクルージョン、外に放り出して敵にするかして、それを恐れている。または、自分が内側に入ったって喜んでいて。とすれば、もしかしたらインクルージョンでもエクスクルージョンでもないものが見つかれば、もっと社会が、今日の表題にもあるように、世界はもっと豊かになるかもしれないし、人はもっと本当の意味での優しさみたいな、「仲間に入れることが優しい」とか、または「排除するだけが憎悪だ」ということではないあり方も、もしかしたら見えてくるのではないのかな、ということを考えてながら参加していました。

今日は最初にも言ったように、何か結論めいたものを出したり、これが答えだというものを出すシンポジウムではなかったんですけども、今後につなげていきたいというふうに強く思っています。改めて今日は、お三方どうもありがとうございました。

シンポジウムを振り返って

岩佐将志

関西学院大学先端社会研究所専任研究員

2009年10月17日、先端社会研究所が主催するシンポジウム「戦争が生み出す社会 Part II - 『見えない敵』への恐れと排除」が開催された。会場には研究者、学生、一般市民の方々などが多数詰めかけ、熱気に満ちたシンポジウムとなった。

前半は作家・映画監督の森達也氏に「世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい」という題名で基調講演をしていただいた。森氏によれば、1990年代後半から9.11 NYテロを経て日本社会で顕著になったセキュリティ強化の動きは、メディアと連動しつつ一般の人々に「我々は善なる被害者である」というイメージを抱かせ、同時に「悪い人を罰してほしい」という雰囲気醸成する役割を果たした。またセキュリティの言説が逆に人々の不安を掻き立て、国外には「北朝鮮」、国内には「犯罪者」といった「敵」を求める心理と結びついてゆくことが説明された。会場からは、「人は『善意』を持ったまま人を殺す」という森氏の話が強く印象に残ったとの声も聞かれた。

後半では基調講演を受け、2名のコメンテーターにコメントをいただいた。まず鈴木謙介氏は現代の戦争を、「軍事戦争」、「経済戦争」に続く「文化戦争」の時代と捉え、自らをクリエイティブな存在として差異化しようとする人々がそうでない人々を差別するという情報化時代の格差・差別問題について述べられた。その上で、現代ではもはや森氏の言う「善なる私たち」というかたちでの一般市民の一体化さえ困難なのではないかという問題提起があった。続く原口剛氏は、2007年に大阪市東住吉区の長居公園に暮らす野宿者のテントが市により強制撤去された事例を基に、「日常的な戦争」が行われる空間に作動する権力の問題を指摘された。ここでは野宿者のテントがあるだけで近隣住民の不安が煽られたことや、テントの存在が道徳的に批判され、「公園の正常化」という名目でテントの撤去が進められたことなど、森氏が説明された国内外の「敵」が生み出されるプロセスと類似の構造が存在することが見いだされた。

一般に戦争とは国家と国家との敵対関係に基づき、敵国の支配領域内の人や物を物理的に破壊し合う行為として想起されることが多いであろう。本研究所で取り組む共同研究「戦争が生み出す社会」でも、とりわけ第二次世界大戦を取り扱う歴史的研究においては、通常この発想が基本となっている。しかし現代の戦争により生み出される社会状況を把握するためには、新自由主義の下での社会的格差増大や「自己責任」の強調により分断された個人の不安と、その反動としてコミュニティの回復を唱える言説の権力性をめぐる動学的

関係という、従来とは異なる視点を取り入れることも課題になるであろう。本シンポジウムはそのことを認識させてくれる上で、極めて意義深いものであった。

シンポジウムを振り返って

辻 輝之

関西学院大学先端社会研究所専任研究員

随分昔に読んだ一冊を本棚から引っ張り出した。エリック・フロムの『自由からの逃走』(Erich From, *Escape from Freedom*, London: Routledge, 1941 年)。シンポジウムでの興味深い発表や議論を、この本の結論に結びつけるのは、如何にも経験のない安直な社会学者らしい、と批判されるかもしれない。しかし、フロムが戦前に描いた「未来予想」は、シンポジウムで話題となった野宿者に対する行政代執行や犯罪に対する厳罰化、「不法」外国人労働者の退去を求める声が高まっている日本の現状を、怖くなるほどの確に言い当てている。

フロムは言う。資本主義の発展に伴い、人間が自由になればなるほど、また「個人」になればなるほど、人間は愛や生産的な仕事を通じて外界と結ばれることを希求する。しかし、この「積極的な自由」を獲得できない(と考える)人々は、「消極的な自由」、つまり「自由や個人的自我の統一性を破壊するような絆によって一種の安定感を求めるようになる」。過去に存在していた(と信じる)絆を再構築できない人々が取る手段は、自分より弱い立場の人間を「他者」として制圧、支配しながら、自らは、「道徳」、「常識」、「世論」など匿名であるが強大な権威による支配に身を委ねる。この議論は、敗戦による経済的困窮と価値の混乱にあった戦後日本社会の分析に心理学の立場から一石を投じた。もし、人々の思想や行動のパターンに似通ったものがあるとすれば、われわれが生きる現代社会、特にバブル経済崩壊以後と敗戦後の日本の間にも何か共通の「社会的性格」(フロム)があるのだろうか。

シンポジウムを企画・運営する立場の人間として自賛が許されるならば、今回のテーマ設定が、広義の意味で「社会学的」であった、ということ。つまり、社会問題(Public)を個人の経験(Biography)に結び付けることが比較的容易であったのではないか。それが、多数の参加者や、発表後の活発な質疑応答という形で表れたと理解している。このようなテーマの場合、研究者は、「もし、我が身に起こったら」という感情なく、客観的に論じることが難しくなり、一方、研究者でない参加者は、日々の「些細な」経験が、より大きな社会問題の理解に貢献できることを実感する。学際的な研究を推進するだけではな

く、その成果を社会に還元することで研究者と市民とを繋ぐ—という当研究所の理念達成に向けて、小さいが一步前進したのではないか。